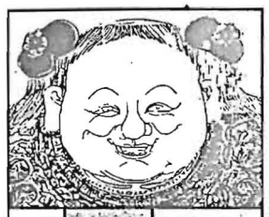
1994-3-1/22

『SAPIO』第6巻第5号通巻113号（94年3月24日号）pp. 32-33 小学館

1994-3



「特権官僚」欲望の迷宮

世襲化した権力者は賄賂でせっせと蓄財にはげむ。日本の常識で対応するとビジネスは必ず失敗する。

東京工業大学助教授 橋爪大三郎 HASHIZUME DAISABURO

総人口12億人以上という世界最大のマーケットであり、安価な人件費に支えられた生産拠点――木況列島・日本企業のベクトルは中国へと向かっている。

本特集では、この〝超大国〟の陰画の部分にあえてスポットを当ててきたが、もちろん我々はこの「巨大な隣国」とビジネスにおいても、文化においても一層深い関係を保っていく必要がある。

「そのためには、〝わかってくれる〟という幻想を捨て、〝日本人と中国人とは物の考え方が違う〟ことを正しく認識せよ」と、東京工大の橋爪大三郎助教授は指摘する。

日中のビジネス・ギャップの大きな要因とされる〝お役所の掟〟を通じて、この問題に迫る。

人間のなかで一番偉い〝官僚〟

優に2000年以上の歴史を持つ中国の官僚制。その背景には、中国独特の社会構造がある。中国社会の基本は、血縁集団（宗族）です。

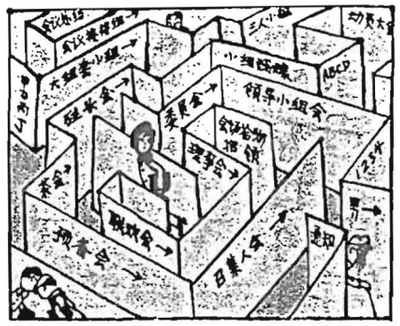
これは、その土地に密着した濃密な人間関係で、これをほっておくと、対立抗争が深まるばかりで、統一も何もあったものではない。

歴代の統治者はこれに悩んだ。そしてその解決として、官僚に頼った。官僚は試験（科挙）で選ぶのが一番いいのですが、試験は血縁と関係ないからで、血縁やコネを断ち切るために、巨大な官僚制が生まれた。

ですから、中国の官僚は、日本の役人とはスケールが違います。官僚は権力ばかりか、地位・名誉・富を一身に集め、人間のなかで一番偉い。

すべての資源が彼に集中するようになっている。

官僚制の特徴は、ピラミッド状の厳格なヒエラルキー構造ですね。社会主義中国でも、この構造は健在で、上から省軍級／地師級／県団級／……と、党・政府の幹部たちはきっちり分けられている。このどのランクに属するかによって、住む家の場所や大きさから、担当するポスト、車の送り迎え、内部資料の閲覧、お手伝いさんの人数と、何から何まで待遇が変わってくるわけです。



会議と手続きが、あまりにも多すぎる（『华君武漫画』より）

このあいだも北京でたまたま葬式に出席するチャンスがあったのですが、幹部だとやっぱり待遇が違う。

そのあと納骨に行ったら、庶民の骨壺安置所を見下ろすような場所に、白壁にレースのカーテンといった洒落な「幹部骨壺安置所」が建っていて、中もやっぱりA／B／Cのランクに分かれているんです。ああ、死んでも官僚制なのだなと思いました。

官僚はやはり特権階級で、庶民からは特別な人種とみられている。

給与の金額などの数字で見ると、まったく差はないようだが、庶民が住宅難で、2DKのアパートに2家族が住んでいる例だってあるのに、高級官僚は庭つきの一戸建て住宅（租界時代にイギリス人が建てた立派なもの）に悠々と住んでいたりする。

さまざまな手当や現物給付があって、自分の財布を開く必要はほとんどない。医療費もただで、老後の年金もあるし、生活の心配は何もない。官僚の子供たちは、通う幼稚園や学校も違うし、そういった同士で結婚し、やっぱり官僚になっていく例が多い。

完全な世襲ではなくてもそれに近い、まさに特権階級なのです。

「党と政府」二重の監督制度が生んだ無責任

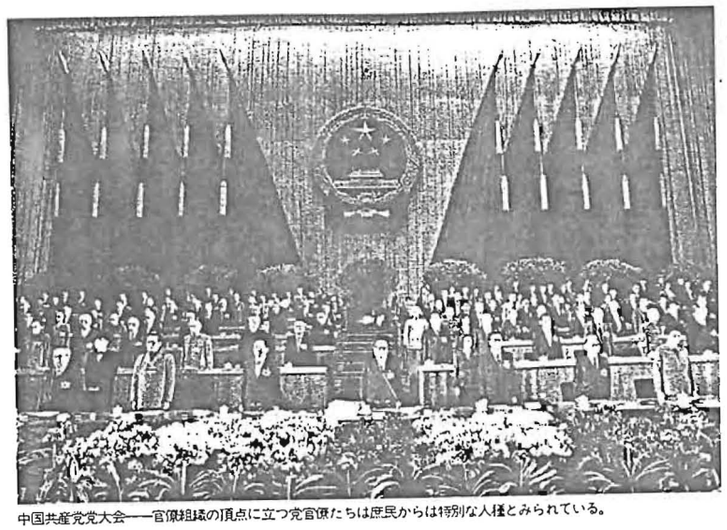
こういう社会だから、官僚のところには、親戚や友人が頼みごとをもってわんさと押し寄せてくる。

こういう人たちを、門前払いはできないわけです。そんなことをしたら、「濃密な人間関係」を大事にする中国では、本人の人間性に問題があると見なされてしまう。

知らない人間には冷たくても、知っている人間にはできるだけ親切にするのが中国のルールだ。

そこで、なにがしかの便宜をはかってもらえば、口をきいてくれた官僚にお礼をするのが人情でしょう。だから特に悪いことをしなくても、官僚のところには自然にお金が集まってくる。

でもこれだけ官僚が特別扱いされ、権力が集中していれば、いろいろ行き過ぎやよくない現象も出てくる。共産党は、政権をとった直後から「官僚主義反対」を叫びつづけているが、官僚主義はひどくなるいっぽうだ。特に改革開放以後、官僚の腐敗がひどくなり、もう限界に達しつつある。



中国共産党党大会――官僚組織の頂点に立つ党官僚たちは庶民からは特別な人種とみられている。

私が翻訳した『中国官僚天国』（岩波書店・3月刊）の著者王輝氏は、官僚主義の症状をつぎのように列挙している。

(1)座ったまま役に立たない議論にふけり、何も実行しない症状。

(2)主人と下僕をとり違え、お高くとまって役人風を吹かせ、官僚ボスに居座る症状。

(3)等級制、官本位でいったん幹部が権力を握ると死ぬまで手放さない症状。

(4)権力が集中しすぎ、党と政府が分離せず、政府と企業が分離しない症状。

(5)行政法規と個人責任制が欠如し、頼りになる法律や条例が何もない症状。

(6)組織が肥大化し、監督官庁ばかりが増えて、効率が低くなる症状。

(7)親しい人間に頼り、人脈に頼って、セクショナリズムになる症状。

(8)権力を私利私欲のために用い、公金を浪費し、政治が腐敗する症状。」

社会主義中国は、官僚制の弊害をかえってひどくしてしまったのですね。

役人は書類づくりに精を出し、見ることもできないほどの書類の山（文山）を積み上げる。

また、無用の会議がひんぱんに開かれ、物見遊山やただ飲み、ただ喰いが横行している（会海）。

高級外車を乗り回すために、予算のあらかたを使ってしまう地方の貧乏自治体もまれではありません。

海外からの投資意欲を拒む婆婆の口出し

中国の官僚病を現状のまま放置しておいたのでは、改革開放にもよくない影響が出る。最近特に大論争になっているのが、国営企業の経営権の問題だ。

中国の官僚組織は、党と政府の2本立て。あらゆる行政単位に、党委員会と政府とがあって、前者が後者を指導することになっている。

部門ごとにもこの原則が生きていて、重工業部門なら、トップが重工業担当の党書記、その次が重工業担当の副市長、その下にも大勢役人がいて、それから工場長、という具合だ。

これらはみんな監督機関なので、婆婆（しゅうとめ）として国営企業の行動に口を出す。

契約を結ぶのも、損失が出た場合のあと始末も、責任があいまいだ。

権限を思い切って現場に移譲するしかないのだが、それでは幹部のやる仕事がなくなってしまう。

そこで何年相談しても、らちがあかないのです。

たとえば、日本の企業が中国に進出しようとして、合弁相手を探しますよね。省か市の政府に頼んで、合弁先を見つけてもらう。工場や条件も気に入って、いざ契約を結ぼうとすると、相手方の責任者が誰なのかわからない。

工場長のうえに、局級の幹部、局長、副市長、党の副書記……といった具合に並んでいて、これらの人びとといちいち食事をして仲よくならないといけない。テレビとかなにか、タイミングよくプレゼントしないといけない場合もある。神経が参ってしまって、合弁をやめる企業もあるほどだ。

＊

本来、清朝が倒れたときに、官僚が中国人の理想である時代は終わるべきだったのです。

だが、あいにく共産党という組織が官僚制そのものだったために、これが生きのびてしまう。官僚制になじんでいる中国人には、共産党はわかりやすかった。いま官僚制は、塩をかけられたナメクジのように縮んでいきつつありますが、まだ当分、中国をさまよい続けるでしょう。

日本人はとかく「中国人も日本人と同じように考えてくれるだろう」と甘い考えを抱きがちだ。それがトラブルの元になる。それを避けるには日本の〝常識〟に頼らず、とにかく中国のリアリティを知ること。それがきちんとした日中関係にとって、不可欠なことなのです。

400年前の大発明 「自分」は今どうなったか？

日本人は自我が未成熟であるといわれる。400年前、ヨーロッパ人は自我を発明した。自我があったからこそ、産業革命も民主主義も生まれた。日本でも、明治の志士たちは強固な自我をもっていた。だが戦後、我々はその自我を喪失していった。国際化社会とは強烈な他者と渡り合う世界。このまま日本人は自我なしでやっていけるのか？

撮影 米谷啓二郎 取材・文 永江 朗

自分とは何か、自我とは何か。自分自身のことなのだから、答えは簡単に出せそうだが、よく考えてみるとわからない。そこで社会学者の橋爪大三郎さんに聞いた。

「自分という意識や、自我みたいなものは、最初からあるわけではないんですよ。たとえば幼児にはないでしょう？ 病気などで頭のメカニズムが壊れたりすると、自分がわからなくなってしまうこともある。自分とは、この世界のなかから、他人や人間でない物（事物）を区分けして、最後に残ったものなんです」

ところが、この自分と他人や物との境界線は簡単には引けない。たとえば私たちは他人を知っているつもりでいる。だが、それはあくまで私（自分）の知っている他人にすぎない。

あるいは目の前のいろんな物を知覚している。これも私（自分）の知りえた限りの物でしかない。だから他人も物も、私（自分）の頭の中で起こっていることである。その意味では、他人も物も全て自分である。

「このように自分の中で起こってくることを精神現象といいます。精神現象のなかからどのようにして自我の意識が出てくるのかが大問題です。哲学の中では現象学（註1）というジャンルがこれを扱います」

すべては「我思う、故に我在り」から始まった

ところが、この精神現象ですが、他者や物の区分けのし方、自我の生まれ方は、全人類が同じというわけではない。それぞれの民族や文化によって違っている。

「ある文化では、目に見えない霊的存在を他者として考えます。それが自分に働きかけていると考えるわけです。また、そういうものを考えず、生きているものの相互関係だけを重視する文化もあります。たとえば中国ですね」

あるいは神という人間の力の及ばないものを考える文化もある。それぞれの文化によって自分や自我は違う。

「それら多様な文化のなかのひとつであるヨーロッパ文明が、いまから400年ほど前に、自我を極端に重視しはじめました」

自分、自我を全ての出発点として考える文化がそこで誕生した。この自我の誕生、主客図式（註2）の誕生は、哲学・自然科学・社会科学の諸学を生み出した。現代の我々も、この自我の誕生以来の知識の体系の中にいる。

「このヨーロッパの自我はデカルト（註3）のコギト（註4）から始まりました。それは疑うための懐疑、方法的懐疑です」

そして信じるための懐疑。

他人が自分と同じ資格でこの世に存在している、と考えてはじめて平等な人間関係、市民社会ができる。また、そのとき物は人間が確実に知り得る客体として存在しはじめる。

「自然は神との関係ではなくて、人間との関係において存在している。こう考えてはじめて、自然は所有したり利用したり研究したりできる対象になった。市場経済も自然科学も、工学も技術もそこではじめて発展し得るのです」

ヨーロッパ人はその出発点に自我を置いた。400年前の彼らは、自我を中心に、それまで神中心だった知識を作り直した。

自我とは、疑いようのない立脚点であり、良いもの、価値のあるもの、権利を持ち、自由であり、想像力を持ち、世界と同じ重さを持つものと考えられた。人権思想も、自由主義も、全てはこのデカルトの方法的懐疑による自我から始まる。

「西洋哲学の歴史はこの原点を確認することの繰り返しです。カント（註5）もヘーゲル（註6）、マルクス（註7）も例外ではありません」

自我が肥大してしまったヨーロッパ文明は、世界的に見ると異常である

ところが、自我にこんなにも重きをおくのは、世界の文化の中でも非常に独特で特異な考え方なのだ、と橋爪さんは言う。

「たとえば我々も深い影響を受けているはずの仏教哲学に、『我』という概念があります。これはヨーロッパの『自

註1 現象学
広義には物自体と区別される現象を研究する学問、あるいは意識が経験することを研究する学問をいう。しかし現在はエドムント・フッサール（ドイツの哲学者。1859年～1938年）が創唱した学統を指すことが多い。フッサールは我々の素朴な日常的態度をいわば括弧にくくったうえで、意識に起こることを純粋に客観的に記述しようとした。ハイデッガー、メルロ＝ポンティ、サルトルらもこの流れをくむ。

註2 主客図式
この世界を、主体である我々と、客体である他人や事物との二つによって成立しているというみなし方。

註3 デカルト
ルネ・デカルト。フランスの哲学者・数学者。1596年～1650年。近世哲学の祖であり、近代合理主義を説いた。著書には「方法序説」「省察」「哲学原理」「情念論」など。

註4 コギト
「方法序説」にあらわれる「コギト・エルゴ・スム」（ラテン語）。意味は「我思う、故に我在り」。一切を疑っても、疑っている自我は最後まで残る。故にこれを認識の出発点とする。これが方法的懐疑と呼ばれるのは、もし純粋に疑うだけならば、意識に現れるのは「思う」だけであり、「我」は出現しないはずだから。

『自由時間』第5巻第3号通巻73号（94年2月17日号）pp. 31-33 マガジンハウス

1994-3-2/22

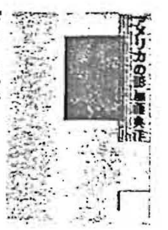
『自由時間』第5巻第5号通巻75号（94年3月17日号）pp. 70 マガジンハウス

青春時代の想いが蘇る。読書には時を超える力がある。

橋爪大三郎 東京工業大学助教授

「ミカドの肖像」
小学館 2060円

「審判」
新潮文庫 480円


「アメリカの影」
河出書房新社 1900円

「はてしない物語」
岩波書店 2950円

「読んでると書けない、書いてると読めない。そういう法則があるような気がしますね」

と語る橋爪大三郎さん。最近は執筆が忙しく、仕事で読む以外は、ほとんど読書の時間がないそうだ。

橋爪さんがいちばん本を読んだのは大学時代。'60年代後半から'70年代にかけて、読書しては友達と議論する日々だったという。

今回、選んでいただいた本にも、その時代傾向が表れているようだ。

●SF「メェルシュトレエムに呑まれて」（『ポオ小説全集』所収 エドガー・アラン・ポオ）

ノルウェー海の大渦に巻き込まれた水夫の短篇小説。

「19世紀半ばとしては最先端の科学知識を散りばめて書いてあるんです。それが興味深かった」

●文学『審判』（カフカ）

理由もなく逮捕されたKの運命を描いた、実存主義文学の先駆。

「カフカの小説にはたいてい出口がない。彼はユダヤ人で、その後の大虐殺など考えれば当然でしょうけれども、ただ、彼の小説は不思議と読後感が明るいんですよ」

●ノンフィクション『ミカドの肖像』（猪瀬直樹）

戦後の天皇制を多角的にとらえた大宅壮一賞受賞作品。

「猪瀬さんは天皇がタブーになる構造がよく分かっているんですね。だから実証的な手続きに徹した。そういう入り方が面白かった」

●批評・評論『アメリカの影』（加藤典洋）

文学作品の思想的背景を探りながら展開される斬新な戦後論。

「戦後の日本はアメリカの文化的な植民地であるという話だと私は思います。勉強になりました」

●科学『位相空間論』（ケリー）

トポロジー（位相数学）を集合論の公理から説明。アメリカの大学院生の教科書になっているとか。

「紙と鉛筆で丹念に追っていくと、一日2ページぐらいしか進まないけれども、なんとなくトポロジーというものが見えてくる本でした」

●写真集『忘れられた人々 中国精神病人的生存状況』（馬小虎）

社会的偏見や差別にさらされている中国の精神病患者たちの姿をとらえた写真集。

「患者さんに溶け込んで信頼関係を築いてから撮影する。しかも単なるヒューマニズムじゃなく、庶民の対極にある何事かを写し出そうとしている。その力を感じます」

●コミック『ねじ式』（つげ義春）

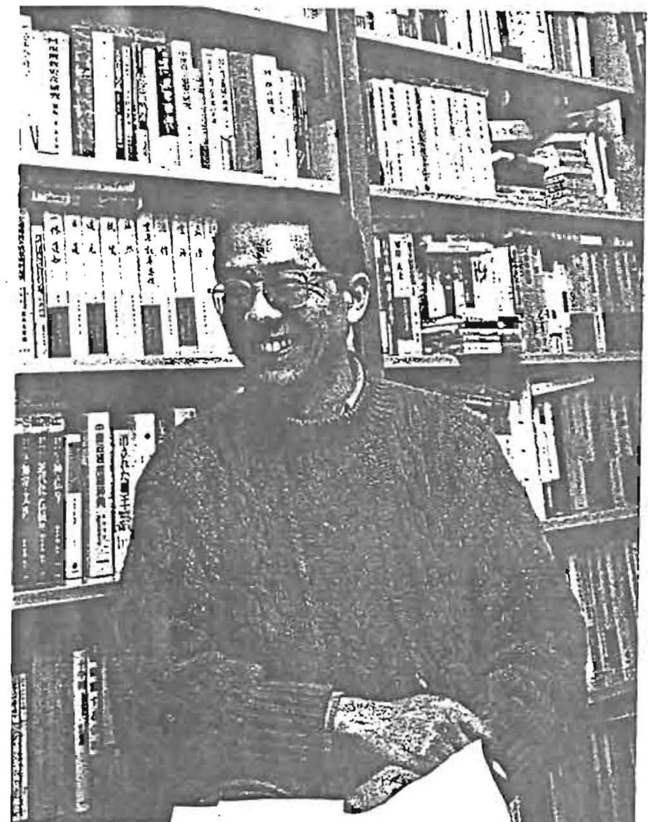
メメクラゲに刺された少年の彷徨を描いたシュールレアリスム作品。日本漫画史に残る不朽の名作。

「学生の頃、一生懸命読んだ本です。私の授業でも使いましたよ」

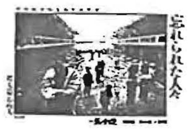
●童話『はてしない物語』（ミヒャエル・エンデ）

物語の呼びかけに応え、本の中に入って活躍する少年の冒険物語。

「エンデはこの世の究極の真実みたいなことを確信していて、童話という形式をとったんだと思います。黙示録の伝統ですね」


はしづめ・だいさぶろう●1948（昭和23）年神奈川県生まれ。社会学者。東大大学院修了後、無所属で執筆に専念。'89年から現職。著書に『橋爪大三郎コレクション』（全3巻）など多数。

「ポオ小説全集 3」
創元推理文庫 580円


「忘れられた人々」
第三書館 3399円

「ねじ式・紅い花」
小学館 1200円

「位相空間論」
吉岡書店 5974円

1994-3-3/22

我』と逆って、マイナスイメージなんです」

仏教では「我」に執着することによって、生老病死、四苦八苦（註8）が生まれるのだと考える。また、「我」から様々な煩悩も生まれる。本来バランスをもって存在しているべき世界の秩序が、「我」にこだわることによってゆがんでしまう。

だから仏教では「我」を捨て、没我・忘我になることが求められる。悟りである。自分と関係なく世界が動いていくということを謙虚に認めることによって精神は安定し、世界は平和になるという哲学だ。

自分より集団が大事な日本人。だからいつも相対評価が大好き

では我々日本人にとって自我とは何だったのか。

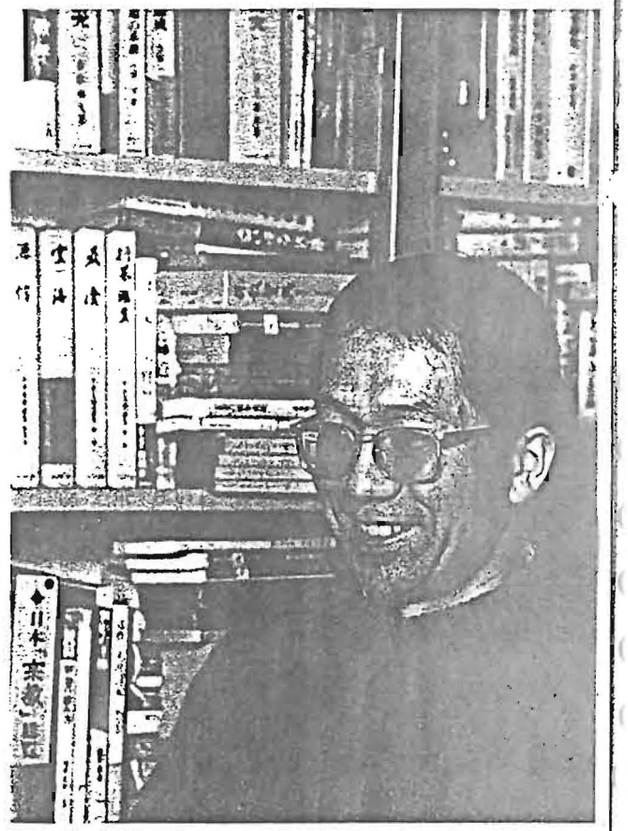
「日本人は、自我に価値を認め積極的に肯定することが、ありませんでした。自分よりも集団のほうが価値があると考えたのです」

日本人は、自分を犠牲にして、所属している集団、企業や学校、国家などにどれだけ貢献したかによって、その人の価値をはかる。

「これは対人関係のなかで価値をはかろうということですね。集団の中で、人と人との間で価値をはかろうとすると、それは相対主義になります。ある人が絶対の価値を持っているとはならない」

120年前まで、我々の文化では、自我とは必ずしも良いものではなかった。そこへ幕末から明治にかけて、ヨーロッパの強力な自我のアイデアが入ってきた。

「知的には大混乱に陥ったでしょうね。



橋爪大三郎●1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院を修了した後、しばらく無所属で研究執筆に専念。'89年から東京工業大学助教授。著書に「仏教の言説戦略」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「民主主義は最高の政治制度である」「橋爪大三郎コレクション」（全3巻）など。

そして、その混乱の決着は今もまだついていないと考えるべきです」

しかし、日本も社会の制度や産業など、表面的には西欧化されたかのように見えるではないか。それでも自分や自我についての考え方は、まだ欧米のようになってはいないのだろうか。

「ヨーロッパの自由主義とは、法律などによって明確に制限されない限り、自分は何をやってもいいという考え方です。個人は制限ぎりぎりのところまで自分の能力を発揮する。その上で全体が調整できなかったら、そのときは法律を変えようと考える」

法律さえきちんとしていれば、あとは予定調和的にうまくいくはず。だから一人一人は全体の調和を考えないでもやっていける。自我中心主義である。

ところが日本の場合は集団帰属がまずある。法律に言いてなくても、お互いに調節しながらやっていく。郷に入れば郷に従う。実際、今でも、上は国家間の外交から、下は経費伝票のごまかしまで、法律と関係なく、まわりの顔色をうかがいながらやっているではないか。

明治の日本は、強固な自我を持った志士たちによって作られた

「自我は環境のいかんにかかわらず、自分は自分であるという原理原則なのだから、どこにいても同じはずです。ところが日本人の場合は『らしく』というのがあるでしょう？　この集団でいうのは中学生は中学生らしく、会社に入れば会社員らしく、おじいさんになればおじいさんらしく。だから、自我はいつまでたっても定義できない」

よく日本人は自我が未成熟だと言われる。橋爪さんは、戦後ますますこの傾向が深まり、日本人の自我が目立たなくなっていると言う。

たとえばそれは明治の人々と較べると顕著だ。

「明治時代には人間一人一人、潜在能力がまるで違うと考えました。江戸時代の社会は組織上のランキングとその人の能力はまったく一致していなかった。家老なんていっても世襲だからみんなボンクラばかりでしたからね（笑）」

明治の指導者になっていったのは、歯をくいしばって勉強し、喧嘩しても強かった下級武士たちだった。

「食い詰めた連中です。彼らは脱藩して、集団への帰属を一度捨てている。そうしてリスクを背負いながら日本という国を作った。幕藩体制と戦い、他の藩と戦いながら日本という国家を作りました。明治にはそういう人達が何千、何万人といた」

江戸幕府や藩という帰属集団が崩壊するのを体験した人々。彼らは自分ではない他者や物というものの存在を身に染みて認識した人々だった。それだけに強力な自我を持っていた。明治政府の組織だけでなく、民間企業も大胆な抜擢人事や能力主義で運営されたのは、そうした強力な自我を持った指導者としてのプライドと責任感による。

「ところがその後、日本のエリートは学校教育で育てられるようになってしまいました。東大法学部ができ、陸軍幼年学校ができ、その卒業生が首相や陸軍大臣になっていきました。彼らは自分で何も決めないうちに、ズルズルと戦争になり、負けてしまった」

戦後は父性原理を、"強いアメリカ"という外国に求め、日本の自我はますます修練を積まなくなった。個々の日本人だけでなく、日本国そのものの自我が未熟なのだ。

団塊の世代、ポスト団塊の世代は、ますます自我を失ってしまった

日本人の自我が未熟である原因は一つある。ひとつは集団重視だ。国家、企業、学校への帰属意識が強すぎる。もうひとつは家庭のなかにおける母親への甘えである。甘えが中心になって教育が行われている。

「子供のときは親の言うことを聞きなさいと育てられ、学校に行ったら皆と一緒にやりましょう、ですから。どちらの場面でも自我というものを発揮しないほうがうまく生きられる」

それが高度経済成長期の心理的風景だと橋爪さんは言う（註9）。そしてそれは団塊の世代、ポスト団塊の世代にも共通してみられる自我の喪失である。

談合、偏差値、保護貿易。自我の喪失の行きづまり。未成熟な自我でヘラヘラしていては、もう生きられない。

一方ヨーロッパ的自我も常に危機に見舞われてきた。

「最近ですと、70年代'80年代に出てきたポストモダンと呼ばれる思想（註10）。あれは自我哲学の変容です。自我もまたひとつの制度、歴史的に構成されたものであって信用できないのではないかとフーコー（註11）やラカン（註12）は言いました」

また、環境倫理（註13）やエコロジー（註14）をとなえる人の登場も、これまでの自我中心主義の見直しである。

「彼らは自我の自由というものに対して修正を加えているんです。いままで個人は完全に自由にやってよかった。でも、そうではないんではないか。いままでは牛を食べていたけれども、牛を食べるのは良くないんじゃないか、牛を食べるのはやめよう。いままで木を切り倒していたけれども、もう切るのはやめよう。環境に優しくしよう。やってもいいんだけどもやらない」

彼らは自由の範囲に関して新しく思想的に線を引こうとしている。だがそれでもやはりヨーロッパの主客図式、主体中心主義の大枠は変わっていない、と橋爪さんは言う。

しかし、そもそも自我中心主義は世界的に見てヨーロッパ文明だけの特殊なことにすぎないのではなかったのか。ならば、なにも我々日本人が自己を確立する必要などないのではないか、という疑問も起こる。

「日本の知識人は最後にはかならずそう言いました」と橋爪さんは苦笑する。たしかに日本民族はほとんど同質的であるために、自分と他人の区別なんてつかなくても社会はうまくいく。一方、ヨーロッパもイスラムも中国も、多民族国家。自分と他人の区別をしなければ、自分の生存すらあやうくなる。

「冷戦が終わり、日本の戦後も終わっている今の時期に求められるのは、日本も世界と同じような発想でやってくれ、ということでしょう？」

サラリーマンよ、会社帰属意識を捨てよ。うちの会社と言うな

たとえば貿易も高度成長の最初のころは保護貿易でやってきた。

その後自由貿易とはいいながら、実はアメリカなどに対して〝女性原理的甘え〟でやってきた。

「そうではなくて、お互いに独立自存でやっていこうというのが、ウルグアイ・ラウンドであり、コメの自由化であり、構造協議ですね」

国際化の時代、あちこちでそういう局面ができている。個人だけでなく、民族・国家単位でそうした決定原理、自己責任原理が求められているのだ。

「少なくともヨーロッパや中国やイスラムのような自我が強烈な国々と、どうやって対等に、うまくつきあっていくかという知恵が求められています。

もし日本が絶対に自我を持たないというなら、それはそれでいいでしょう。でも、じゃあどうやるのかということをちゃんと考えるべきです。いままでのままではだめです。このまま自我が未成熟のままでは、混乱は深まっていくだけですね」

では現代のサラリーマンが、幕末・明治の志士たちのような頑固な自我を取り戻すことができるのだろうか。

「武士というのは身分ですから、藩を離れても武士は武士。しかし、現代のサラリーマンは身分ではなくて属性ですから、会社をクビになったらサラリーマンじゃなくなってしまう。そこが難しい」

我々は日常会話でも自分が働いている会社を「うちの会社」と呼び慣れている。うち・そとという共同体の原理を、会社にまで持ち込んでなんの抵抗感も感じない。会社への帰属意識が骨の髄まで染み込んでしまっているのだ。いうまでもなく、株式会社とは経営者のものでも社員のものでもなく、株主のものである。

いっそこのまま不景気が深まり、大量失業時代でも来れば、我々は否応なく自我を確立しなくてはならなくなるだろう。だが、自我を確立できなかった人々の末路は悲惨だ。

はたしてそういう社会は、幸福な社会といえるか。自我の確立はやはり難しい。

註5　カント
イマヌエル・カント。1724年～1804年。ドイツの哲学者。現象界が仮象や幻夢の世界ではなく、人間にとって経験的実在であることを強調した。彼の著書「純粋理性批判」は「時・現象学」として構想されていた。他に「実践理性批判」「判断力批判」など。

註6　ヘーゲル
G・W・F・ヘーゲル。1770年～1831年。ドイツ観念論の代表的哲学者。彼は世界の歴史を意識の発展と考え、この意識の経験を記述するものを現象学とした。著書「精神現象学」では精神のもっとも単純な、感覚的な確信から出発して、絶対的な知にいたる過程を叙述した。著書には「論理学」「美学」ほか「エンチュクロペディー」など。

註7　マルクス
カール・マルクス。1818年～1883年。ドイツの哲学者、革命家。ヘーゲルの意識と歴史の関係を逆転させ、意識は生産関係によって規定されると考えた。著書には「資本論」など。

註8　四苦八苦
四苦とは生・老・病・死。八苦とは四苦に、愛するものと別れる愛別離苦、憎い者に会う怨憎会苦、求めても得られない求不得苦、心身の成長にともなう苦である五陰盛苦を加えたもの。

註9　高度成長期の日本の自我の原風景を描写したものに、橋爪さんは江藤淳の「成熟と喪失」を挙げる。

「彼は、終戦によって父親はいなくなり、日本の家庭は母親と子供だけになったと象徴的に言っています。その日本の母親は、母親自身を解体していく。そういう母親に対する甘えでもって、日本は経済的に大きくなってきた、そんな感じで書いています」

註10　ポストモダン思想
狭義にはJ・F・リオタールの提唱した、近代の思想や文化が人間主体の解放や進歩、革命などの名のもとに正統化されてきたことに対し、不信と異議をとなえる思想。広義にはフーコーの構造主義から、ドゥルーズらのポスト構造主義、デリダ、ネグリまで含むこともある。日本でも'80年代中ごろ、大流行した。

註11　フーコー
ミシェル・フーコー。1926年～1984年。フランスの思想家、歴史学者。著書「言葉と物」において、「人間」という概念はたかだか二世紀半のヨーロッパの発明にしかすぎないことを示し、その終焉を予告した。

註12　ラカン
ジャック・ラカン。1901年～1981年。フランスの精神分析学者。フロイト主義者として出発して、構造主義の理論家となる。著書には「エクリ」など。

註13　環境倫理学
エコロジーの哲学的基礎づけ。人間だけでなく、自然にも生存権を認め、次世代への責任を持ち、エネルギーなどを地球全体の規模で考えることを提唱する。日本では加藤尚武氏が紹介者として有名。

註14　エコロジー
1970年代以降、地球規模での環境破壊をどう防止するかが世界的問題となった。流行の背景には冷戦の緩和と核戦争の可能性が遠ざかったことなどが挙げられる。

1994-3
4/22

大室　幹雄著『劇場都市』pp.577-583　ちくま学芸文庫　1994.3.7

解説　稀有なる大陸的書物

橋爪大三郎

北京国際空港を離陸した成田行きのジェット機は、一時間あまり、真南に向かって飛行する。眼下は見渡すかぎり、広々とした華北平野である。

上空から眺めて思うのはまず、平らだなあということ。少し山らしい山があるのは、山東半島のつけ根ぐらいで、あとはどこまで行ってもまっ平ら。日本の急峻な山並みを見慣れた目には、こんなに平らな場所が世の中にあってよいのかと思える。つぎに、そこここに、村が散在していること。かなりの人口密度であろう。どの村も、紡績工場かなにかのように甍の列を矩形に並べている。道路もまっすぐで、格子状に走っている。さらに、緑が少ないこと。まとまって樹の生えている場所が見当たらない。降水量も少ないとみえ、溜池があちこちに作られて、鈍い光を放っている。

こんな光景を見ていると、いろいろ腑に落ちることがある。

中国人はなぜ、左右対称が好きなのか？　なぜ、偶数（二、四、六、八、……）を好むのか？　なぜ、一戸建てよりマンションのほうが好きなのか？　なぜ、毎日がぶがぶお茶を飲むのか？　なぜ、漢字は表意文字なのか？　前々から気になっていたこんな脈絡のない疑問が、中国について少しずつ理解を深めていくと、ある日、順番に解けていくように思った。そしてそのヒントは、よく考えれば、みな『劇場都市』のなかに書いてあった。

*

古代文明は、例外なしに、都市国家として始まった。メソポタミアもインドも中国もギリシャ・ローマも、そうである。唯一、都市国家を知らないのは、日本だけだ。偉大な社会学者マックス・ウェーバーは、世界の文明を比較して、こう述べている。日本人はウェーバーの本を読んで社会科学を勉強したから、いちおうの知識はあるはずだが、この違いをなるほどと肌身で実感するのは、容易なことでない。

頤和園や景山公園など、中国の庭園はみな人工庭園である。中国はあまりにまっ平らなので、変化をつけるとしたら、そこに人間の手を加えるしかない。湖が必要なら土を掘り、山が欲しければ土を盛る。そして周りをぐるっと塀で囲む。中国の伝統家屋である四合院も、同じ発想で出来ている。まん中に庭（院子）があり、それを矩形に建物がとり囲み、周囲は塀で外界から隔てられている。都市（城市）はこれが巨大になったもので、周囲を堅固な城壁がとり囲んでいる。左右対称、偶数、矩形、壁へのこだわりは、こうして生まれてくる。

ひるがえって日本を考えてみると、たいていの人里からは山が見える。農村はゆるやかに

手つかずの自然に連続しており、都市は境界のあいまいなまま農村に連続している。こんな場所で、完璧な人工空間をつくり出すのは無理である。むしろ、垣根の向こうにふいと山が見えたりする、対称性の破れ、人為と自然との融合を、日本人は偏愛する。この感覚を前提にすると、中国文化に対する体系的な誤解・誤読が生じてしまう。

食べ物や飲み物に対する考え方も、ずいぶん違う。

中国はあまりに平らなため、水がゆっくり流れる。流れるというよりも、淀んでいる。当然、生水は飲めない。そこで沸かして飲むことになるのだが、このままではまずいので、葉っぱを入れる。これがお茶だ。だからその実体は、お湯である。乾燥していて喉がかわくので、これを何杯もがぶ飲みする。日本は、水がおいしいので、そんな必要はない。だからお茶は、まず薬として入ってきて、そのあと、コーヒーみたいな嗜好品になった。食べ物もなまでも食べられる。中国の料理は、魚もから揚げにするなど、加熱・殺菌が基本で、それをなるべくあたたかい状態で食べる。それに対して、日本の料理は、冷たいまま食べるものが多い。

そこで日本人は、自分を理解するため、中国についてまず理解すべきなのである。ためしに、さきほどの疑問を、あべこべにしてみるべきだろう。日本人はなぜ、左右非対称が好きなのか？　なぜ、偶数ではなく奇数を好むのか？　なぜ、マンションよりも一戸建てのほうが好きなのか？　なぜ、表音文字の平仮名・片仮名を発明したのか？……

かえって、分割以前の全体、「道」を浮かび上がらせることになる。こうして、反都市的な幻想、園林都市への転回が予告されて、本書は閉じている。

*

『劇場都市』を手に取って誰しも思うのは、そのヴォリュームである。

本書を組み立てているロジックそのものは、それほど巨大な構築でない。基調となるモチーフは幾本かであり、それが変奏されながら、繰り返し色合いの異なった曲想をたどってゆく。モチーフは、都市の社会学であったり、都市のコスモロジーであったり、中心／周縁図式であったりする。それが具体的な材料で肉付けされ、中国文明というひとつの宇宙をありありと浮かび上がらせていく。

私は専門でないからわからないが、こういう大きな仕事をしている人は、世界中でいま大室さんだけなのではないかと思う。まず、欧米の書物と中国の書物とを、縦横に照覧すること。これがむずかしい。欧米人には、漢字という壁があり、中国人には、体制という壁がある。日本人（だけ）が、両方に目配りできる絶好のポジションにいる。しかもそのなかで、大河的なモチーフを貫いて、中国文明の全体像を描きあげること。専門の研究者は、自分の小さな専門分野にたてこもる傾向がある。それが安全なことなのだ。しかし、個別の研究を活かすのは、全体的な脈絡である。あえてその全体に取り組もうという学者は少ない。大室さんの仕事の大きさは、その総合力にある。あらゆる材料や要素を盛り込み、なおかつそこに、独自のモチーフを貫いている。これが稀有であると思う。

中国の古典や研究書を丹念に読むなどということは、あまり時代の脚光を浴びず、流行らないやり方であると思われてきたかもしれない。しかしそれは、間違いである。ほんとうの情報は、古典のなかに詰まっている。古典が価値を減じないように、古典についての優れた研究は、現代的価値をもつ。分量がかさばり、しかも少々読みにくいところもあるかもしれないが、読者のみなさんが、『劇場都市』を読み通し、中国文明、ひいては人類について、豊かな洞察を得られるように希望する。

（1994.1.22）

命がけ三郎　——訪日雑記その五

王　輝

日本に行く前、天津社会科学院の日本帰りの同僚から、日本の教授の中には「仕事狂」が少なくない、としばしば聞いてはいた。百聞は一見に如かず、訪日してこの感をいよいよ深くした。

飛行機で東京へ飛び、午後成田空港に着いたら、東京工業大学の橋爪大三郎教授が、空港に出迎えに来ていた。空港から何回も電車を乗り換え、東京工業大学についたらもう空は真っ暗。大学から、私の宿舎、国際交流会館に、そこからまた橋爪教授の自宅にと、強行軍が続き、私はすっかり息が切れてしまった。橋爪夫人は医学部博士課程で勉学中で、橋爪君が家についたあと、あたふたと帰ってきた。それから二人して台所に立って料理を作り、食事がすんでから会館まで一緒に送ってくれた。その日は朝五時半に天津から車で北京空港に向かい、そのあと一日いろいろあったあげく、やっとのこと休息の地にたどり着いたわけである。だが、橋爪君は？　彼は帰宅したあと、まだ「徹夜」が待っている。というのは、私が持ってきた講演用の長い二篇の原稿を読んで、そのうち一篇を選び、さらにその原稿のどの部分が日本の学者に興味を持たれるだろうか、意見を聞かせてくれるように頼んであるからである。翌日の午前、私が講演原稿を削って、コンパクトにする作業をスムースに進めるためだ。次の日はちょうど日曜だったが、橋爪君は、朝八時までにコメントを私の宿舎の郵便受けに入れておきます、ノックはしません、と言う。私は翌朝七時に起きたが、そのあともひっそりしていた。八時になって郵便受けを開けてみると、中国語でしたためたコメントがもう入っていた。あとで聞いたら彼は、夜中の二時に書き上げて、そのあと郵便受けに届けに来たのだという。こりゃあ本当に「仕事狂」だわい、と私は思った。

月曜の午後、講演が始まる時刻までに、橋爪君は私の履歴と講演レジュメとを日本語に作成してプリントし、参加者に配った。その日は彼が司会をし、中国人留学生が通訳をつとめた。私は講演のあいだ、一時間あまり立ちっぱなしで疲れたので、質疑応答になったら坐って話したが、傍らの橋爪君はしまいまで立ったままだった。彼は中国語も、英語も日本語もよく出来る。質疑応答は、原稿がないので少し翻訳がむずかしいので、橋爪君はときどき補足説明をしてくれた。あるひとが中国の改革における社会心理の問題を質問したとき、私は、人びとのなかには「相対的剝奪感」を抱いているひともいると答えた。私はこの概念が翻訳できないといけないと思って、特に英語を用いて説明をした。すると橋爪君はただちに、黒板に「相対剝奪」の四字を書き記した。またあるひとが中国では国有経済の比率が下がっているが、これからどうやって公有制を主としてやっていくのかという質問をしたとき、私は、公有制とは国有だけでなく、集団所有制も含むから、その地位は脅かされないと答えた。すると橋爪君はただちに、黒板に、公有制＝国有制＋集団所有制、と書き記した。もちろんもっと詳しくいうならば、これに、合資企業のなかの国有、集団所有の部分を加えなければならないのではある。私が雑誌『中央公論』で橋爪君と対談したとき、雑誌社は専門の通訳を雇った。あとで速記があがってきたとき、橋爪君は翻訳が正確でないと考えて、もういちど録音を聴きなおして原稿を書き変えた。彼はほんとに「仕事狂」で、なにごとも手を抜かず、とことんやらないと気がすまない。

橋爪君は1948年生まれの、若い社会学者で著書も沢山ある。単独の著作を10冊、共著を9冊も出版している。そのテーマは広汎で、たとえば『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』などがある。去年一年でも、単独著書を4冊も出版している。どうしてそんなに沢山本が出せるのか？　それは、大学院の時代に執筆したものを、整理して出版したものもあるからだ。学生時代、彼は「勉強狂」だったとみえる。ある日本人は、毎日6時間以上眠っていたのでは大学に合格できず、4時間以上眠っていたのでは有名大学に合格できない、と言った。こういう言い方は誇張がありそうで、ちょっとうなずけない。そんなにずっと睡眠不足でよいだろうか？　天帝がいくら日本人をひいきにしているからといって、彼らの睡眠の生理的メカニズムがアメリカ人、中国人と違うはずもない。電車のなかで居眠りしている人もたくさん見かけた。橋爪君が言うのには、高校時代、学校が遠かったので、朝6時に家を出、帰宅は夕方の6時だった。食事をし、風呂に入るのを1時間とすると、10時半に眠るから、勉強の時間は3時間半しかない。そこで高校に進んでから、土曜日曜も休まないことにした。余暇の時間はすべて勉強にあてた。橋爪君がこうしてものごとに徹底するのはよい態度、刻苦勉励の態度、ものごとをすこしもゆるがせにしない態度、目標を立てたらすこしもそれを譲らない態度だと言える。これは、中国人がよく言う「天行健、君子自強不息」に似ている。

私はこうした、仕事でも事業でも命がけでやるやり方に賛成する。人間は、命がけでやるというところがないといけない。古代ローマの哲人セネカは、こういううまいことを言っている。「毎時毎分を自分の事業につぎこんでいる人は、明日がどうなってほしいと願わないし、明日がどうなろうと恐れない。なぜかというと、たとえ寿命が短かろうと、彼にとってはそれで十分だからだ。最後のときにあたって、叡知の人はあわてることなく死を迎える。」私は毛沢東が、講演のなかで、『水滸伝』の"命がけ三郎石秀"の話をしたのを覚えている。昔は革命に命をかけると言ったものだが、実際は、勉強も研究も、事業も建設も、みな命がけが大事なのだ。私が橋爪君に、君はほんとに命がけ三郎だねというと、彼はにこにこした。

1994－3
6/22

天津日报

拼命三郎

——访日杂记之五

王辉

在赴日访问之前，常听天津社科院访日的同事讲，日本教授中不少是"工作狂"。百闻不如一见，来日本以后才深有感触。

我乘机飞东京，当天下午抵成田机场。东京工业大学桥爪大三郎教授到机场接我。从机场几次换乘电气化列车，到东京工大时天色已晚，从大学到给我安排的住所——国际交流会馆，再从会馆到桥爪君的住宅，一路急行军，我已气喘吁吁。桥爪夫人正在攻读医学博士，桥爪君到家后，她才匆匆赶回。两人一起下厨，饭后又一起送我回会馆。我从清晨5时半在天津乘车赴首都机场。一天多的奔波，总算找到了一个栖息的驿站。可是桥爪君呢？他回去还要"开夜车"。原来我带来两篇文字很长的演讲稿，我请他看看，选定一篇，并请他提提日本学者对哪些内容更感兴趣，以供我翌日上午对讲稿作压缩、删节时的参考。那天正是周末，桥爪君说明晨8时将所提意见放到我的房门信箱中，以免打扰我。我于早晨7时就起床了，没有听到任何动静，等到8时开门看看信箱，原来他用汉语写的读后感早已放在里边。事后才得知他于凌晨2时写完后即送来放到信箱中。我想他真是个"工作狂"。

在我周一下午演讲时，桥爪君已把我的个人简介和讲稿的提纲译成日文发给与会者。那一天由他主持会，一位中国博士生作翻译。我站着讲了一个小时，两腿发酸，回答问题时坐下来，而桥爪君始终站在一旁。他的汉语、英语、德语都很好。当回答问题时，由于没有文字稿，翻译比较难，桥爪君不时作些补充。当有人问到中国改革中的社会心理问题时，我谈到有些人存有"相对剥夺"感。我怕翻译不好，特意用英语说了这个概念。桥爪君随即把"相对剥夺"这4个汉字写在黑板上。当有人问到中国的国有经济所占比重下降，今后如何保持公有制为主这个问题时，我回答说公有制不仅是国有制，还包括集体所有制，其主体地位是不会改变的。桥爪君随后用汉字在黑板上写出：公有制＝国有制＋集体所有制。当然更全面的说法，还要加上合资企业中的国有、集体所有的成份。我应约在《中央公论》杂志社与桥爪君对谈，杂志社专门请了翻译。事后整出文稿，桥爪君认为译得不准，又重新听录音进行了修正。他作为一个"工作狂"，做事求善求好，有一种强烈而又执著的追求精神。

桥爪君生于1948年，作为一个年轻的社会学家，著述甚丰。他出版的个人专著有10部，与人合著的9部。他的著作涉猎面很宽，如语言竞技与社会理论、佛教的言论战略、原始结构主义等。去年一年就出版专著4部。一年怎么出这么多书呢？原来有些是上学时写的，现在整理出版了。看来他上学时就是个"读书狂"。在日本有人说，每天睡觉超过6个小时考不上大学，超过4个小时考不上重点大学。我对这种说法不敢苟同，是否有点夸张？长时间睡眠不足行吗？就算上帝大大地眷顾日本人，他们在睡眠这种人生的生理机能上，也跟美国人、中国人一样。我看到有些人在车上打瞌睡。桥爪君告诉我，他上高中时离家远，早晨6时出来，下午6时回家，吃饭、洗澡一个小时，每晚学习3个半小时，晚10时半睡觉，从上高中开始，他从来没有周末和周日。放假时间都用来学习。桥爪君这种执著追求是一种好素质，一种刻苦拼搏的素质，一种锲而不舍的素质，一种认准了目标决不回头的素质。这颇有点像中国人爱说的"天行健，君子自强不息"。

我赞成这种工作上事业上拼命的追求精神。人是要有点拼命追求精神的。古罗马哲人塞涅卡说得好，"把每时每刻都用在自己的事业上的人，是不想望明天，也不害怕明天的。这就是为什么不论寿将多少，对他来说都是足够的，当末日来临的时候，睿智的人会毫不犹疑地去迎接死亡。"记得毛泽东在讲话中曾提到《水浒传》中的拼命三郎石秀，过去的年代曾提出革命加拼命，其实不论读书、做学问、干事业、搞建设，都要加上拼命的。我对桥爪大三郎说，你真够得上拼命三郎，他会心地笑了。

* * * * * *　* * * * * * *　* * * *

1994-3-7/22

FUTURE VALUE QUEST

有識者ヒアリング調査　結果報告書

1994. 1.

株式会社　電通

［　C氏　］

●企業の生産要素である人的資源の安定的確保における諸問題。
- 年功序列・終身雇用の雇用慣行は、昭和３０年代の急速な経済成長と人口構成における特徴を背景に成立していた。今や企業側にこれを維持する理由はなく、生活者も企業を離れた自由を求め始めている。このことは中間乃至底辺の労働力不足という問題に直結する。
- これに対応して海外展開による空洞化という選択肢を選べる業種は限られており、単純労働力を海外から受け入れることは必然となろう。非公認のまま実態が進行すれば二重市場が生じ、治安問題等アメリカ型の大きな社会的コストが発生することは避けられないだろう。国際分業を前提とした人員再配置が必要である。
- 生産人口を一律に定年で切ることは、社会的に損失の方が大きい。若年者とのタイムシェアリングで徐々に負担を小さくしながらも可能な範囲で生産に携われる筈。高齢化社会にあたり、労働市場構造をそれに適した形に変えてゆくべき。
- 一方、実力主義社会から脱落した人は、大学で職能を身につける再トレーニングを受ければよい。

●市場に外在する人為的要素として、これまで日本が依存し、最大限に恩恵を享受してきた自由貿易をめぐる大きな問題。
- 日本としては＜米農家の保護＞と＜自由貿易体制の保護＞のどちらを取るかが迫られており、国益保護の見地から後者が優先されるのが自明である以上、早急に別の手法で農村・地域社会への施策を講ずる必要がある。その変革コストは、自由貿易の受益者たる企業が負担すべきであろう。
- 「市場」も、「政治」「軍事」同様外交の一部であるという認識を持つべき。
東西冷戦の終結によりアメリカにとっての日本の価値は低下し、繁栄の結果のみを享受しコスト負担をしていない「日本問題」はより大きくなりつつある。
- 国連常任理事国入りにも、「国際的な責任」を学ばせ日本を教育しようというアメリカの意図を見いだすべき。ＰＫＯ、憲法九条問題についても、国際社会における日本の役割を認識した上で、制度趣旨から柔軟な解釈・運用がなされてしかるべき。

●市場に外在する自然的要素としての環境問題。
- 今日課題とされている環境問題は、かつての公害問題と違って急性ではなく慢性的な、局部的ではなく全域的な被害をもたらす。
- 現状では、後進国も含めて各国が独自の経済成長を主張をしている。全体としての合理性を追求しコントロール機能を持つ国際機関の不在が最大の問題。企業はこれを社会的責任の一端として、解決のための研究等をサポートすべきだ。

●企業観の転換のためには、ドラスティックな対処が必要。
- 現在の企業観を形成しているのは、農村的ムラ社会の伝統と、明治維新の指導者の多くが今日の「会社員」に非常に近い「藩士」だったことによるところが大きい。
- 企業が福利厚生の名の元に行っていることの多くは、企業と社員との癒着の原因となっている。社宅にせよレクリエーション施設にせよ、本来社会資本によってカバーすべき領域であり、地域社会が貧困である原因もここにある。
今日の不景気は、これらを是正する方向に作用するかもしれない。

PLANNING ADMINISTRATION

計画行政

1994-3-8/22

持続的発展を支える意識-政策-技術

第17巻 第1号（通巻38号）

日本計画行政学会・第16回全国大会特集号

日本計画行政学会
JAPAN ASSOCIATION
FOR
PLANNING ADMINISTRATION

パネルディスカッション（3）

政策実施の組織とエコマインド

— NGO，ボランタリーネットワーク，政府・企業の役割 —

オーガナイザー：村本　理恵子
（専修大学）

【基調講演】
棚橋　祐治（(財) 産業研究所）
【座　　長】
小林　好宏（北海道大学）
橋爪　大三郎（東京工業大学）
【パネリスト】
植田　和弘（京都大学）
梶　　秀樹（国際連合地域開発センター）
江原　　淳（専修大学）
【コメンテーター】
宇野　公子（UNITED NATIONS）
【オーガナイザー】
村本 理恵子（専修大学）

1. はじめに

現在の地球環境問題は過去の公害問題のように工学的な技術の進展だけでは解決できないものである。高度産業社会を支えてきた機械論的パラダイムがその限界に突き当たったと言っても過言ではない。地球という1つの生命体の延命，そしてそこに生活の場を持つ人類の延命という相対立する目的に対し，政府，企業，国民がそれぞれいかなる役割を負えばよいのか。本パネルディスカッションはこの問いに対して，何らかの回答の方向性を示唆することを目指したものである。

従来のような政府主導型のフォーマルな組織による政策実施にとどまらず，最近，従来の政策実施組織の枠組みにとらわれないインフォーマルな新しい組織が，ローカルなレベルから非常にグローバルなレベルまでそのネットワークを拡大してきている。ここでの組織原理は決して1つではなく多様な形態を持ち，また，ネットワークの形態そのものも多様である。このような現状にあっては，政策実施の組織とエコマインドについて語ろうとするときに経済学，組織論，ネットワーク論，政策論というインターディシプリナリーなスペシャリストの議論なくしては実りのある成果は期待できない。

本パネルディスカッションでは下記の諸氏によって持続的な発展の実現に向けた，NGO，政府，企業の役割の新しいネットワークというテーマをめぐって活発な議論が交わされた。多様な分野のスペシャリストの議論はまさに実りある成果として示唆に富む提言をいただくことができた。

2. 各パネラーの発言要旨

図1に示されているわが国のエネルギー環境対策の基本的な枠組みに沿って政府サイドからの問題提起がなされた。

○小　林：エネルギーの問題を市場メカニズムに全面的に依存していてはもはや難しい。先進国主導によるグローバルな環境規制に対し，発展途上国の側からは自国の発展への足かせとして大きな反発が起きている。

従来，経済学では経済自体をホモ・エコノミクス，すなわち合理的経済人として扱ってきた。し

1994-3-9/22

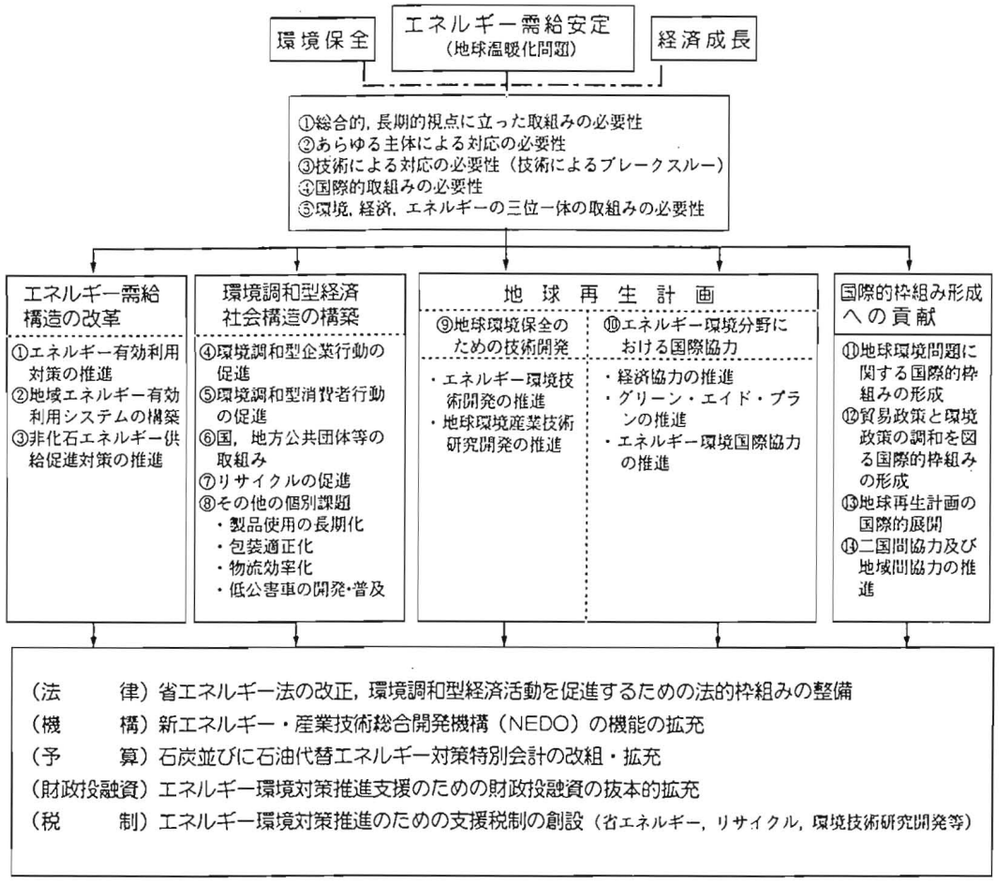


図1 エネルギー環境対策の総合的推進

かし，経済主体の行動様式では今日の世界の状況を説明することはできなくなっている。発展途上国では，いわゆる後進国エゴと称される価値判断が政策に反映され，先進諸国との利害対立として表面化している。

経済学的にみた場合，公的な規制と市場的な誘導との関係が問題である。

○橘　爪：初期の公害問題は急性的かつ局所的なものであったため，それに対する処方を容易に発見することができ，一国レベルでの解決が可能であった。一方，現在のエネルギー・環境問題はグローバル，慢性的かつ長期的なものであり，この中には世代間の利害対立の問題も含まれている。したがって，その解決には初期の公害問題のような対症療法的な即効の処方がない。

また，グローバルな広がりを持っているため，現在ではこれに対応する組織が存在しないというのが現状である。まず，問題を解決するための主体，主張をどのように形成するのか，当然ここには教育の問題がかかわってくるはずである。また，広く，かつ，薄い利害対立という新しい問題状況に対し，どのような調停論理を見いだすことができるのかということが問われている。

NGOの問題をとりあげてみると，誰がどのような思想をもってこれを支援するのかという点がどうも明確ではない。特にわが国での活動の現状をみるとき，ここでの組織原理がどうもはっきりしないように思われる。

○植　田：南北問題，世代間の対立，人権・民主主義の問題，そして貧困の拡大と，われわれが現在直面している問題を，地球の社会持続可能性という面からとらえた場合，どうやら成長パターンの転換にさしかかったという気がする。

エネルギー・環境問題は従来外部不経済として市場原理の外側で論じられていたものである。しかし，これを市場の失敗としてとらえてみると，価格のない大事なもの，例えば水や空気（ただし，水は最近ではタダとは考えなくなってきているが，）のようなものが実はタダではないのだという認識をいかに持つかということが問題である。

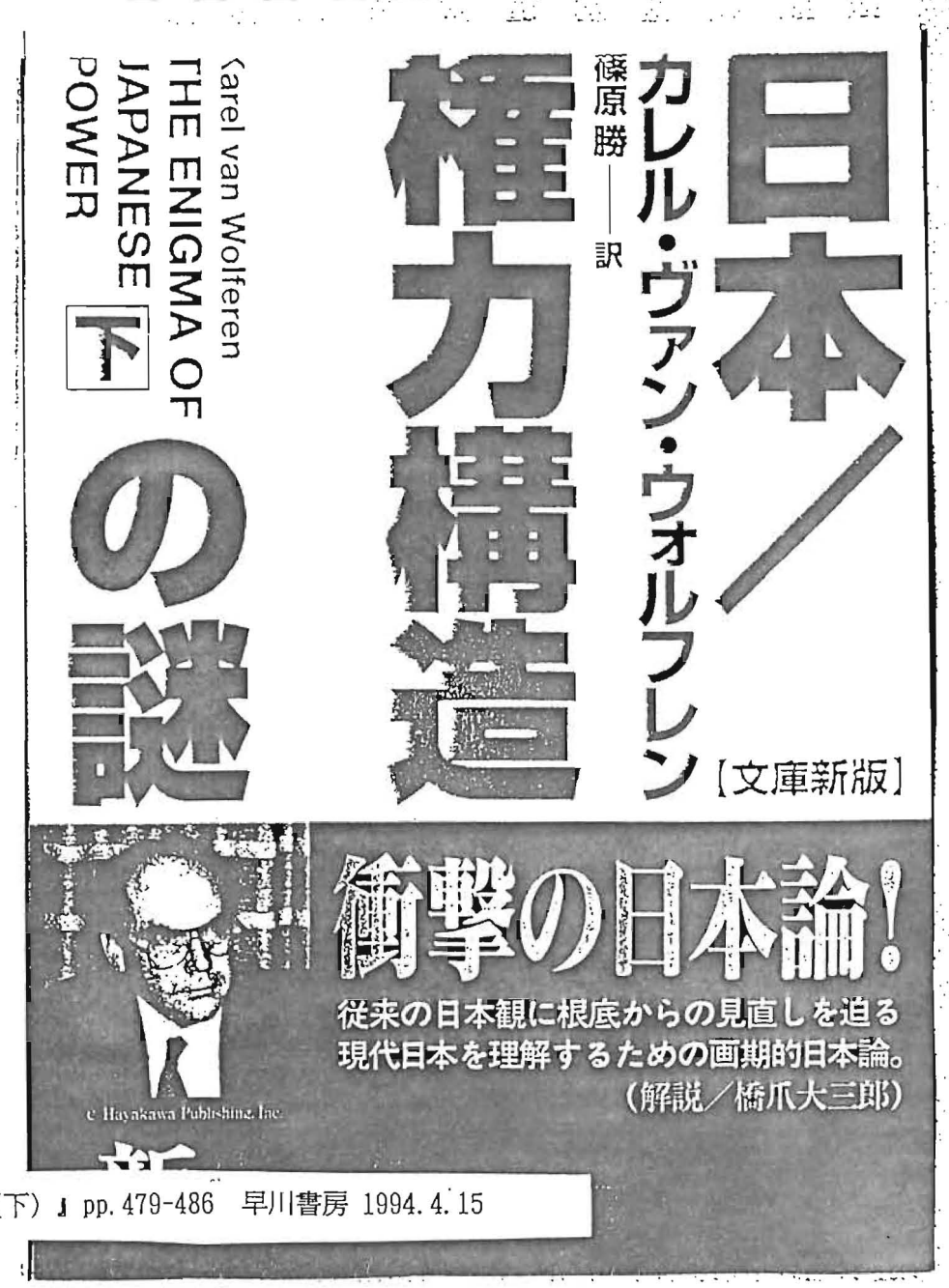
また，発展途上国の問題を考えたとき，できあがった技術をただ移転するのではなく，技術と社会システムのしかけを同時に移転するという視点が必要である。まさに経験の伝達である。

○梶：現実に発展途上国の支援に携わっている経験から言えば，基礎のない国へいくら技術だけを移転してもだめである。しかし，意識改革ということがよく言われるが，経験しないと意識改革というものはできないのではないかという実感を持っている。支援というとどうも国家間の工業誘致合戦になってしまう傾向があるようだ。

途上国からの内在的な要請がない場合は技術支援がなかなかうまくいかない場合が多い。植田氏のご指摘のように，技術移転に際しては日本における学習のプロセスそのものを経験として伝達していくことが必要であると考えられる。

○江　原：マーケティングというのは社会的交換を促進するための工学である。その観点からこの問題を考えてみたい。先程小林氏が市場メカニズムに依存していてはこの問題が解決できないとおっしゃったが，私は市場メカニズムを通さない限り，解決の実現は不可能であると考えている。

先程から主体の形成，意識改革という問題が論じられているが，新しい行動を学習させるコストとそれによって得られるベネフィットとのバランス（心理的／社会的）によって，すなわちベネフィットがコストを上回ってはじめて消費者は新しい行動を学習する。一方，意識は必ずしも状況を決定しないというのも事実である。それは状況変数の影響を受けているからである。したがって，状況との相互作用という状況において，状況変数をどう高めるかが問題である。



1994-3-10/22

改革は〈システム〉との戦いである

東京工業大学助教授
橋爪大三郎

一九八九年。この年に、『日本／権力構造の謎』という書物が現れた幸運を、日本国民は深く感謝すべきだろう。

ウォルフレン氏は本書で、さながらリトグラフかCTスキャンのように精確な日本社会の像を描いてみせた。そしてその精確さは、多くの日本人を当惑させ、イライラさせた。日本人は浮世絵のように、都合よくデフォルメされた曖昧な自画像を好んできた。そこへ本書が現れて、お前は胴長でにやけた猿顔だと、現実をつきつけたのだ。言われてみればそれが、欧米の正統な理解だろうと納得するしかない。ぐうの音も出ず、不愉快である。

戦後の日本経済の繁栄は、アメリカの傘、冷戦体制の枠組みによって支えられていた。自民党の一党長期政権も官僚たちの許認可行政も、この枠組みのもとで続いてきたものなのだ。冷戦が終われば、こうした戦後日本のあり方も根底から変化せざるをえない。

一九八九年、冷戦の崩壊はすでに確実なものとなっていた。アメリカは、世界戦略の練り直

カレル・ヴァン・ウォルフレン著『日本／権力構造の謎（下）』pp. 479-486　早川書房 1994. 4. 15

しを始めた。これまでのように同盟国・日本に遠慮して、甘い顔をする必要はなくなった。いっぽう日本は、ポスト冷戦時代へ向かって大きくうねりだした変化に、まだ何の対応も見せていなかった。日本人は、日本の戦後が永遠に続くかのように信じたがっていた。だから、本書を火つけ役とする「日本見直し論」は、アメリカを中心に幅広い読者を獲得したのである。本書は、アメリカの対日戦略を練りあげようという人びとに、基本認識を提供した。また日本は、欧米からわが国がどう見えるかについて、本書から多くを学んだ。要するに、ポスト冷戦時代の両国関係は、本書からスタートしたのである。

*

本書（英語版）が出版されてから、五年が経った。世界も日本も、大きく変わった。特に日本では、細川連立政権が誕生し、「五五年体制」に終止符が打たれた。

だがこれで、日本は本当に変わる（変わった）のだろうか。変わるという楽観論もあれば、結局変わらないという悲観論もある。ウォルフレン氏はたして、そのいずれに与するのだろうか。

昨年（一九九三年）の秋、一橋大学の大学祭企画で、ウォルフレン氏と討論をするチャンスがあった。そこで私は、さっそくこの点を尋ねてみた。氏の答えは、日本の権力構造（〈システム〉）は深く根をおろしているが、改革は可能かもしれないという、まことにバランスの取れたものだった。特に、小沢一郎、羽田孜、江田五月といった改革派の政治家たちを高く評価

していることが印象に残った。ここ数年の日本の変化をウォルフレン氏がどう見ているかは、今回新たに書換えられた、文庫版のための「結び」に詳しくのべられている。

*

もうひとつ、ウォルフレン氏とのやりとりで印象に残ったことをのべておこう。

本書を読んで私は、昔読んだもう一冊の書物を思い出した。それは、Roberts, John G. 1973 *Mitsui: Three Centuries of Japanese Business*, Weatherhill（ジョン・G・ロバーツ『三井：日本における経済と政治の三百年』安藤良雄・三井禮子監訳、ダイヤモンド社、一九七六年刊）で、本書ほど評判にこそならなかったが、三井文庫などに残された膨大な資料をもとに、明治維新から戦後にいたる日本近代の光と影とを、壮大な構想のもとに実名入りで克明に描きあげた大作である。こうした仕事が日本人でなく、外国人の手でようやくなされたことを、恥ずかしく思ったのを覚えている。

ロバーツ氏の『三井』は、戦後間もなくのところで終わっていた。その仕事の後を『日本／権力構造の謎』が、現代まで引き継いでいる——私はこう考えるのだが、こうした印象が正しいか、それをウォルフレン氏に聞いてみた。氏の答えによると、ロバーツ氏は古い友人で、『三井』の仕事にも大いに敬意を払っているとのこと。彼の仕事を覚えていてくれる人がいて嬉しい、という返事だった。さらに氏が、ロバーツ氏がごく最近亡くなったので悲しんでいるとつけ加えたのは、私にとっても残念な報せだった。

1994-3-11/22

*

さて本書、『日本／権力構造の謎』は何を主張しているのか？　それは、本書自身が雄弁に語っているし、著者自身による詳しい解説もある。重複するのを承知のうえで、大事なポイントを繰り返しておこう。

まず第一に、〈システム〉とは何かを理解することが重要である。〈システム〉は氏の独特な用語なので、注意を要する。

システムと言えばふつうは、いくつかの要素からなる全体、という意味である。見かけ上は複雑な現象でも、要素（変数）のあいだの関数関係などのかたちで、その正体を突き止めることができるものがシステムである。けれども、本書の〈システム〉は、その反対に、なかなか正体がつかめないアモルフ（無定形）なもの、という意味なのだ。ポスト・モダン派の人びとなら、さだめし「リゾーム（根塊）」とよぶところだろう。

〈システム〉の反対物は、（西欧社会の近代的な）「国家」である。国家とは、政治的に責任をとる主体（a center of political accountability）であって、誰がどういう根拠にもとづいてどういう権力を行使しているのかを、はっきり目にみえるかたちにしたものだ。権力を、権利や権限として可視化・分節化し、法によってコントロールすること。これは、近代社会の根本前提である。しかしウォルフレン氏のみるところ、日本にはこうした前提がそもそも欠けている。日本の社会にももちろん権力現象はあるのだが、人びとはそれを権力と意識したがら

ず、それに法や制度などの明確なかたちを与えることを好まない。民主主義は、権力を法によってコントロールする制度であるはずだった。しかしそうした見かけの裏でも、実はこうしたアモルフな権力が人びとをとらえている。ウォルフレン氏が〈システム〉と名前をつけて描こうとしているのは、こうした日本の権力のあり方なのだ。

つぎのポイントは、具体的な人名を散りばめた、論証の圧倒的なぶ厚さである。政界、財界、マスコミ、犯罪組織など、日本社会のあらゆる領域にわたる切れ味のするどい分析は、ジャーナリストとして数え切れないインタヴューをこなしてきたウォルフレン氏の、膨大なデータの蓄積に裏打ちされている。それは、ただやみくもに集められたデータではない。〈システム〉の作動メカニズムを浮かびあがらせようという、明確な戦略にもとづいたものなのだ。

こうした戦略的着眼は、どこから来たのだろうか？　人類学に、参与観察という方法がある。人類学者が未開社会に入り込み、原住民と生活をともにしながら、さまざまなデータを集積していくやり方である。その際、人類学者の観察眼をいやがうえにも鋭いものにするのは、よそからその社会に入り込んだという距離感である。私はウォルフレン氏も、同じ距離感で仕事をしていると思う。氏は、西欧文明の正統的な教養の側に立ちながら、日本の〈システム〉をそれに合わないと切り捨てるのではなく、もうひとつの「合理的」な秩序として理解しようと悪戦苦闘する。彼のインタヴューに応じた役人や政治家は、原住民のインフォーマント（情報提供者）である。それを素材とした本書は、良質の人類学者による異文化体験の報告書、とも言えるのだ。

本書は、日本社会に対する異和感、異質感をひとつの基調にしている。このような感覚は、西欧社会を価値の座標軸とするところからやってくる。ウォルフレン氏がこのことをどこまで意識しているか知らない。だが、本書の批判精神が、あるべき国家・対・日本の〈システム〉、あるべき民主主義・対・日本の戦後民主主義、……といった対比のうえに成り立っているのは確かなのだ。氏は、西欧的な価値にコミットしているからこそ、日本人なら問題にもしない社会運営のさまざまなあり方のなかに、権力が潜んでいることに気付くのである。これは、異文化体験としての日本研究の利点である。

では、こうした西欧的な価値へのコミットは、本書の客観性をそこなわないのであろうか？　そこなうどころか、むしろこうしたスタンスこそが、本書を客観的で、公平で、科学的な書物としていると私は思う。なぜならば、西欧的な価値を掲げて地球大の文明を築きあげた西欧社会と、それに伍しながら独自の社会運営にこだわり続ける日本社会とが、異質な他者として互いを発見しあうのは、文明史的な必然だからだ。

日本社会は、日本固有の価値を隠し持ったまま、西欧文明に適応し、近代化をとげてきた。日本の近代化のプロセスは、明治維新から一九四五年までの時期（前半）と、それ以後（後半）とに分けられるだろう。前半は、日本が外国と異質であることを、日本人が十分に意識していた時期だった。独自性を打ち出そうとした日本の自己主張は、破局を迎えて終わった。後半は、日本が外国の価値に順応しようとした（異質性をなるべく意識しまいとした）時期だった。そしてこの時期は、日本社会がほんとうに西欧社会と足並みをそろえてやって行く気があ

るのかという諸外国からの問いかけによって、終わろうとしている。湾岸戦争とともに持ち上がった国際貢献の問題も、構造協議や市場開放をめぐる問題も、そうした問いかけが形を変えたものだ。

この問いかけが、ピンと来ないという日本人が多い。それは自分たちが、どれだけ西欧社会とかけ離れた社会運営をしているか、想像できなくなってしまったからだ。それもこれも、〈システム〉が現実から目をそむけさせ、権力が知性を麻痺させているせいであると、ウォルフレン氏はみる。日本人をそうした虚偽意識から解き放ち、自分をとらえている前提を気づかせるための書物――それが、『日本／権力構造の謎』なのだ。それは、日本が明治以来対峙してきた、西欧文明からの問いかけだからこそ意味をもつ。

*

本書の日本語版は、日本のジャーナリズムや読書界でもかなり話題になった。しかし、「日本異質論」「日本叩きの書」というレッテルを貼られる場合がほとんどで、その内実がきちんと理解されることは稀であった。

本書は、かつての『菊と刀』（ルース・ベネディクト著）に匹敵するような、すぐれた日本社会論であると思う。これほどスケールが大きく、実証的、しかも包括的な書物はあまり例がない。もしも日本について知りたくて、なにか一冊だけ読みたいという外国人がいれば、本書を読むことを私は勧める。

日本の社会で暮らしていると、時として、そのあまりの閉塞性、萎縮した思考、自己主張の無さ、無原則、退嬰的な幼児性に、うんざりさせられることがある。そういうとき、本書のことを思い出せるのは救いだ。ここには確かに、日本社会を国際的な視野から見すえる確実な視線がある。日本の国際性とは、外国の情報をいち早くキャッチすることではない。外国語が操れるようになることでもない。日本社会のこの場所で、どれだけ国際社会の批判的なまなざしに耐えられるだけの行動ができるか、ということなのだ。日本人のなかのある割合の人びとが、日本社会を国際的なフォーマットでもって運営していくことを、自分の任務と考える。それが、これから始まる改革の出発点である。改革とは、〈システム〉との戦い、権力との戦いである。そうした改革の課題を、日本人にメッセージとして送り届けた書物、それがこの『日本／権力構造の謎』なのである。

（はしづめ　だいさぶろう・社会学）

1994－3－12/22

BOOK HUNTING 〔出版ニュース〕94.2月中旬号

（おまけ）

ブックハンティング'94

現代思想のゆくえ　著●小阪修平

橋爪大三郎コレクションI、II、III　著●橋爪大三郎

なにかの理由によって自分の考え方というものを組み直そうとするときがある。ノートをまえにして、エンピツをにぎる。ぼんやりと考える。ともかく書きはじめないことにはなにも始まらない。書いていくと、運がよければ、どうにかなる。そういうものである。なにかを考えはじめるというのは、なにかを書きはじめるということである。こうして、考えはじめようとすると、ひとはウィトゲンシュタインのようにノートをつけはじめるのである。

自分の考え方を組み直そうとするという行為には、もちろん、その背後に個人的な経験の時間が流れている。その経験は程度の差はあれ、ともかく苦い味をともなったものであろう。考え方を組み直そうという行為は自分の経験を組み直そうという行為ともなる。だけど、思考の組み直しはかならず言葉によってなされる。そして、言葉とは思考そのものでもある。言葉のスタイルとは、そのまま、思考のスタイルとなる。

私が考えようとするとき、私は言葉を必要とする。私は言葉を選択する。どういう言葉を選択するか、どういう文体を選び取るか、これはそのまま、私の思考を・私の考え方を選択するということである。どういう言葉が選ばれ、どういう文体が採用されるか、これは単に個人の趣味の問題とは言えないものがある。そこには、おそらく、思想とか考えるという行為についての考え方の違いのようなものが現れてくるはずである。

小阪修平の『現代思想のゆくえ』（A5判・二四〇頁・一八〇〇円・彩流社・一九九四年一月）をみてみよう。ここでのテーマは相対主義である。理想とか理念とか真理とか呼ばれるもの、あるいは絶対的なものの存在が信じられなくなった同時代の意識を論じている。よく言われるように「真理」への意志はその内部にテロリズムの可能性をはらんでいる。マルクス主義をはじめとして、そうした事例はいくらでもある。デリダやドゥルーズそしてフーコーたち、現代思想がまず攻撃の主たる対象としたのはこうした真理への欲望である。小阪は西欧の思想史を整理し、真理への意志とそれの解体の過程を平易に語っている。

そして相対主義の季節が訪れる。「真理」なんてものはない、差異だけがある、簡単に言ってしまえば「好み」の違いだけがある、という言葉があたかも自明のことであるかのように語られる季節がくる。それがわが国では全共闘運動の崩壊過程と時間的に重なっている。このダブリが全共闘世代の相対主義に独特の色彩をあたえているのである。

しかし考えてみればすぐに分かるように、相対主義を一個の思想的立場とし、そこから言葉を発することは、論理的に成立しないものである。その言葉は、相対主義に従うかぎり、他者に届くことはないからである。他者に到達しえないという自覚を持ちながら、他者に向かって言葉を発するという行為は、誠実であれば、まずできるものではない。そういう人間は沈黙するしかない。相対主義を名のり、なおかつ言葉を書き連ねていく人間はあきらかに「何か」を信じているのである。その「何か」は相対性のバブルのなかに落ち込むようなものではない「何か」であるはずである。

本書でみるかぎり、小阪もまた相対主義の季節のなかで、ある種の精神的な「失語症」を経験したようである。それは自分の発する言葉が他者に届きうるかどうかといった懐疑の感覚である。そして、著者はいま「経験」という言葉を軸にして、相対主義からの脱出を考えている。しかし、その方向はもはや旧来の「真理」への意志への回帰ではありえない。神様の方へと簡単に鞍替えするわけにはいかないのである。だが、しかし、著者がどこにいこうとしているのか、その方向はここではきわめてあいまいで漠然としている。私たちには見えてこない。

その理由は、問題そのものが複雑であるということよりも、著者が選びとった文体、言葉のスタイルに関係しているように思われる。著者は一貫して「私の経験」というものに固執する。これ自体はとうぜんのことであろう。「私の経験」をはずしたところに思考の営みは存在しない。たとえ「科学的な」言語を使用する場合においても、そういう言語を使用するという行為・決意のなかには「私の経験」というものが動機として背景にある。

しかし問題はここからはじまる。「私の経験」から思考をはじめ、言葉を組立てていくさい、その言葉は「私の経験」という重みをひきずっていってよいものか、これは別の問題である。簡単に言えば、他者に向かって言葉を発するとき、その言葉のなかに、発する人間の個人的な生理が匂ってくるような場合、その言葉が力を持ちうるかという問題である。著者はきわめて個人生理にちかい形で言葉を組立てていくのである。それが著者が自覚的に選択した方法であるかにみえる。そして本書を読むさいに考えさせられるのは、むしろこの問題なのである。思想は感情のレベルで受け止められる側面を持っているが、他者の提示した思想を肯定するか否定するかは感情の問題ではない。思想は私的な感情とともにはじまるが、思想が他者に届くのは、私的な感情の次元を越え、脱感覚的な言語で構成されたときである、と言えないであろうか。哲学的な思考が文学や宗教に還元されるものではないとすれば。だけど、問題はこの次元になると、文体はまさに個人的な好みの問題というよりも、思想の問題となる。著者はそういう自覚から出発している。

橋爪大三郎の文体はこの点で小阪とは対照的であるようにみえる。今度、一九七〇年代末から八〇年代にかけて書かれてきたものが『橋爪大三郎コレクション』としてまとめられた。全三巻構成で「身体論」「性空間論」「制度論」というのが各巻のタイトルである（B6判・各三〇九〇円・勁草書房・一九九三年一〇月～一二月）。現象学と唯物論とを突き抜けた地点において、社会を記号空間としてとらえていこうというのが橋爪の基本的な戦略であり、それを著者は「〈言語〉派社会学」と呼ぶ。しかしいまここで興味深いと感じられるものは、著者がその理論を展開していく場合に採用している文体であり、言葉である。

橋爪は小阪と同世代の人間であり、橋爪が「〈言語〉派社会学」を構想していく背景にはもちろん彼自身の個人的な経験の時間がある。そしてその経験は小阪のそれと重なりあっているところもあろう。しかし、橋爪が選択する言葉そのものは、まったく「中性的」である。私たちは橋爪の発する言葉とその組立てをあたかも数学を読むようにして読むことができる。それは著者が意識的に採用している文体である。このコレクションの第三巻「制度論」の「まえがき」にこう書かれている。

「消費社会のかげりとともに、どうみても底が浅かったブームも去り、わが国の知識界を大きな空虚がおおっている。ここに欠けているのは、誰でもが認めうる前提に立脚し、堅固な論理に従って、考えるべきことを考えていく構築的な努力だ。」

誤解をさけるために言っておくが、小阪には「考えるべきことを考えていく構築的な努力」がないといっているのではない。むしろ逆である。小阪は自分の発する言葉が他者に届きうるかという問題を自分のなかで決着をつけないと、言葉自体を発することができないタイプである。そして、確かにそうした問いはたしかに必要なものであり、ものを書き出すときは誰でも自分のなかで何らかの決着をつけているはずである。しかし、おそらく、こうした問いをひきずったまま発っせられる言葉は他者に届くことはないのではないかということが問題なのである。私たちはどこかで「私」というものを切断した言葉が必要となるのでないか。私たちが言葉を読むとき、私たちは他者の個人的な経験を読むのではない。言葉それ自体を読むのである。そのとき言葉には言葉固有の論理しか存在しないのではあるまいか。

小阪の作品と橋爪の作品とを読むとき、その内容的な事柄自体を別としても、「私」と「私の発する言葉」との関係について考えさせられるのである。これは現代思想の基本問題とどこかでつながっているはずである。

堀川 哲
（札幌大学・思想史）・評

『蔵前工業会誌』第 895号（1994年 6 月号）pp. 10-18　蔵前工業会

1994-3-13/22

講　演

改革開放下の中国経済と社会

——平成 5 年10月25日開催の東京工業大学講演より抄録——

天津社会科学院長
王　輝
東京工業大学一般教育等助教授
橋爪大三郎 訳

1．中国経済の発展と，当面する問題

80年代の全般を通じて，中国の経済は平均で 2 桁に迫る高い成長を続けた。これは，同じ時期における世界の平均のみならず，アジア地域の平均をも上まわっている。1992年，中国の国民総生産はほぼ 2 兆 4 千億元（人民元）に達し，国力は十数年前に比べ顕著に高まった。農業経済の方面では，1992年の食糧生産額は4425.8億キロ，綿花は452.8万トンに達し，12億人を食べさせていく問題は基本的に解決している。工業の面でも，鉄鋼，石炭など重要な工業製品の生産量は，世界のトップレベルに並んでいる。科学技術も長足の進歩をとげた。

だが巨大な人口の中国は，1 人当たりの資源が少なく，多くの面でまだ遅れた状況にある。中国は発展途上国なのだ。国民総生産は約4586億ドル，1 人当たり400ドル弱である。中国の経済・社会発展はレベルがまちまちで，原子力や宇宙産業のようなトップレベルの科学技術もあれば，原始的な農作業もあり，賑やかな都会もあれば貧しい辺地の農村もあるという顕著な対照を抱えている。

改革以来，生活水準は大幅に上昇したが，消費構造からみると，エンゲル係数は依然59.6％と高く，都市で53％，農村で62％である。これは，アメリカの農業関係組織の基準によると，ようやく「絶対的貧困」を脱し，「どうにか暮らしている」段階である。1990年の都市住民の平均居住面積は6.7平方メートル，一部の大都市では多くの家庭が厳しい居住条件に耐えている。地域による条件の違い，各地区間，都市／農村間の不均等発展も目立つ。東部沿海地区は経済も発達し，1 人当たりの収入も高いが，中西部は相対的に遅れており，収入も低い。例えば上海市の 1 人当たり国内総生産は1990年で6675元なのに，貴州は890元にすぎない。全国1903県のうち，まだ520もの県が貧困のため，国家財政の援助を受けている。経済の発展した広東省でも，年収が 1 人当たり200元に届かない貧困県がある。80年代中頃から都市／農村住民の収入格差が拡がり，1985年の1.7：1 が，1992年には2.3：1 に開いている。

中国は経済発展のなかで，つぎのような問題に直面している。

(1) 農村の巨大な余剰労働力が，中国経済の飛躍の大きな負担になっている。

中国が現在抱える農村の余剰労働力は約 2 億人で，今世紀末には2.5億人に達する見込みだ。中国はあまり都市化していないので，農村の余剰労働力に提供できる就業機会が不足している。現在，毎年約 7 千万人の農民が，農村と都市を流動しており，巨大な「民工潮」〔臨時工の群〕となって，交通運輸，都市設備，社会の治安などを圧迫している。政府は門戸を開いて農民をむやみに都市に迎え入れるわけにも，行政手段で農民を土地に縛りつけておくわけにもいかない。これだけ大勢の人びとの就業問題をどうするかが，中国の今後の発展のためにどうしても解決すべき問題である。

(2) 産業構造の不合理が，長らく有効な解決をみていない。

中国は70年代末～80年代初めに，重工業のみ発達し軽工業や農業が立ち遅れている問題の調整に入った。農業，軽工業の速やかな発展を促し，豊かな消費財市場を育成したのだ。だが80年代中期以降新たな構造の不合理が出現した。投資のサイクルが短く収益の大きな加工工業が基礎産業の支持能力を超えて発展し，エネルギー，交通，通信，基礎原材料などの産業が，国民経済のボトルネックとなっている。国務院電力部の資料によると中国では最悪の場合，全国の工業生産能力の40％が電力不足のため稼働せず，年間で2400万元もの生産減をもたらしている。1992年の貨物輸送に対する鉄道の満足率は，わずか50～60％。鉄道の輸送能力に余力がないので，エネルギーや物資の供給が滞っている。各地域で収益の高い商品に争って投資をするため，建設も外資導入も重複し地点も分散して，規模の経済を達成することができない。たとえば中国の最近の自動車生産は120万台なのに，自動車会社は125社もある。うち年産 1 万台を越えるのは21社のみ，最高でも年産10数万台にすぎない。これでは年産30～40万台の経済規模に遠く及ばない。このように各地方の産業が似たような構造で，低水準のまま競合しており，産業構造の改善を妨げている。

(3) 国有企業の経済効率がなかなか上昇しないことが，国民経済を阻害する大きな要因になっている。

中国には，国有企業が約40万社ある。その生産額は全国の工業総生産額の80％近くにのぼり，国家財政の主要な収入源になっている。だが，長らく計画経済体制に縛られていたため，多くの企業は活力が乏しく効率も低く，製品は質が悪くて市場の競争・環境の変化について行けない。このため，経済効率を改善できないでいる。一部の企業は，設備の破損を補修できないでいるほどだ。そこで，外部の経済環境が不利に働くと，これらの企業は極端な窮地に陥り，国家財政や従業員の生活に大きな困難をもたらす。

(4) 経済発展のプロセスでつねにかなり大きな景気の波が生じ，経済に混乱をひきおこしている。

80年代を通じて，中国経済は高度成長を続けてきたが，その間何回か大きな波動を生じた。80年代の中期と後期には 2 度経済が過熱し，通貨が膨張した。特に1988年，通貨の膨張率が20％近くに達したので，政府は景気に急ブレーキをかけざるをえず，80年代末に連続 3 年の景気後退にみまわれた。去年から景気も回復し成長が加速して，通貨膨張の危険が一定程度現れている。政府は，1988年の教訓を活かして金融・税制改革をいっそう進め，経済体制の転換を促進して経済過程のよからぬファクターを除去し，景気後退をまぬがれる努力をしている。

2．中国社会のいくつかの特徴

改革開放下の中国社会は，以下にのべる重要な特徴を具えている。

1）公有制を主とする，各種の所有制・各種の経済主体が発展をとげた。

改革が中国の社会・経済構造に生みだした重大な変化は，国民経済の所有制構成が，改革以前の単一公有制から，各種の所有制・経済主体へと転換をとげたことだ。非公有制経済の発展が，支持され奨励されている。1992年末で全国の私営企業は13.95社，資本金は221億元，従業員は232万人である。また工・商業にたずさわる個人企業〔個体戸〕は1535万社，その資産は601億元，従業員は2467万人に達している。外国の投資による企業（中外合資企業，中外合作企業，外国独資企業を含む）は8.4万社だ。1992年の工業生産額に国有企業，集団企業〔集体企業〕，個人企業・私営企業・外国系企業の占める割合はそれぞれ，52％，35％，13％である。ちなみに1978年以前，工業総生産額に，非公有制企業の占める割合は0.7％にすぎなかった。流通の領域では，1992年の商品取引総額に国有企業，集団企業，非公有制企業の占める割合はそれぞれ40.8％，28.2％，31％である。しかも，私営企業の実態は，統計数字よりもう少し上回ると思われる。集団企業，国営企業に分類されている私営企業もある。個人経営者にも，規模が私営企業の水準に達しているのに，そう分類されるのを嫌がる者が少なくない。

各種の所有制，各種の経済主体は，今後どのように発展していくだろうか？中国国家情報センターの予測では，2000年までに，中国の工業総生産額に国有企業の占める割合は1/4にまで低下し，集団企業が1/2，私営企業が1/4を占めることになろう。また商品取引総額に対しては国有企業が1/3，集団企業が1/6，個人・私営企業が1/2を占めることになろう。21世紀の初めまでに，中国の所有制構造は「三足鼎立」となるのである。

2）社会階層が多元化するという趨勢がうまれた。

改革開放以前には，公有制一辺倒の所有構造，分化の不充分な産業構造，中央集権的な計画経済，所得分配の平等主義等々のため，中国の社会階層構造は単一だった。だが改革以後，所有制構造・産業構造の多様化や，市場経済の伸長，社会成員間の所得格差の拡大にともない，異なった利益グループが現れて，社会階層が多元化した。目下中国には少なくとも 8 つの基本的な社会階層が存在する。

(1) 社会管理者の階層

これは，各種の社会管理活動にたずさわる階層で，頭脳労働を主とする職業集団。主に各級の党・政府の幹部を含む。この階層のメンバーは1000万人あまりである。彼らは経済・政治・文化生活をコントロールする組織者・政策決定者で，その地位と機能のため，しばしば地域生活を指導し指揮する階層に収まる。

(2) 公有企業の管理者の階層

主に国有企業，集団企業の工場長，社長などの管理者を指す。計画経済時代は公有企業が大部分政府の直接管理下にあり，相対的な独立性を欠いていたので，彼らは完全に党・政府の幹部にまじっていた。今日では，市場経済の発展と公有企業経営機構の転換にともない，ますます多くの公有企業の管理者が，生産・経営の自主権をえている。彼らは役割意識や役割行為のうえで，党・政府機構の官僚たちとすでに違ってきている。これは今まさに形成されつつある階層であり，彼らの人数や社会的機能も，改革の深化にともなって増加し，上昇している。

(3) 私営企業主の階層

これは比較的多くの生産財を所有し，主に雇用した労働者の労働に依存しつつ自分で危険を負担し，収益を享受する社会集団である。この階層の出現は，完全に改革開放の結果である。現在，この階層に属するのは100万人あまりだが，増加の傾向がいちじるしい。彼らは，中国大陸のもっとも富裕な集団で，そのグループ意識もますますはっきりしてきている。経済的実力を利用して，公益事業に資金を提供したり，各種の人びと・政府の活動を援助したりするなどの方面で，地域の政策決定者や政策の決定に影響を与え，政治協商会議の委員や人民代表大会の代表など，名誉職や地域の指導的な職務をすすんで引き受けている。

(4) 個人労働者の階層

これは，少額の資本を持ち，主として自分や家族の労働に依存しつつ，独立して生産・経営に従事する労働者の集団である。社会主義改造の始まる以前，中国に元からあった階層のひとつだ。改革開放以来，この階層はすみやかに復活し，今日すでに2000万人に達している。彼らの経営する業種は生産と生活のほとんどあらゆる領域にわたり，国民経済の繁栄に重要な役目を担っている。彼らも「先に豊かになった」階層だが，その経営規模と豊かさの程度は私営企業に劣る。

(5) インテリ〔知識分子〕階層

これは，科学技術や文化知識の発明・創造・伝播・応用の仕事にたずさわる頭脳労働者の集団である。主に，科学・教育・文化・衛生部門の科学者，技術者，教育関係者などを包括し，人数は3500万人前後である。改革開放以来，この階層の社会的・政治的地位は大いに高まったが，所得面ではまだ改善の余地がある。

(6) 労働者〔工人〕階層

これは，直接第 2 次・第 3 次産業に従事する労働者の集団を指す。人数は1.5億人で全国の就業人口の1/4を占め，農民に次ぐグループだ。彼らを就業先の性質で区分してみると，国有企業・集団企業に勤める労働者もあり，私営企業（外資企業を含む）に勤める労働者もある。一般的に言えば，私営企業の労働者の所得は，公有企業の労働者の所得より多いが，労働の密度も高く，甘受すべき心理的圧力もずっと厳しい。

(7) 農民労働者〔農民工〕階層

これは，主に80年代以降に増えた中国特有の社会階層で，改革開放以来，町村の第２次，第３次産業が吸収した農村の余剰労働力である。彼らは年間を通じて現業部門の工場での肉体労働に従事し，大部分の所得をえている。この点でみる限り，彼らは労働者階層と似ている。しかし，中国の戸籍管理制度が「農転非」〔農村の戸籍からほかに転ずること〕を厳格に制限しているため，身分は依然として農民のままで，戸籍は農村にある。田畑の耕作を請け負っている者も多い。繁農期や工場労働の合間には，家族の農作業を手伝い，失業や就職待ちの場合にはやはり農業に頼って生活を保障しなければならない。彼らは都市の正規の労働者と違い，都市住民の各種の手当てや公費医療などを受けられない。

農民労働者を，さらに２つに分類できる。第一は，農業をやめ故郷も離れ，都市の工場や外地の郷鎮企業〔農村企業〕で働き，生活がとても不安定で景気が後退するとすぐ解雇されてしまう人びと。第二は，農業をやめても故郷は離れず，自分の村か近所の町で働いて，日帰りで通勤し，自分の家に住んでいる人。

農民労働者階層の人数はすでに１億人を越え，ますます増加しつつある。

(8) 農民〔農業労働者〕階層

これは，主に農業生産の肉体労働に従事するグループで，その数3.5億人，中国社会でもっとも人数の多いグループである。だが，この階層が労働力に占める比率は不断に低下し続け，1978年の73.83％が，1991年には60％となっている。上述の農民労働者と大部分の個人労働者は，この階層から分化していった。

改革開放以来，農民階層の生活水準はいちじるしく上昇した。だが最近，工業／農業産品の鋏状価格差が再び拡大しているため，この階層の所得増加は比較的ゆるやかとなり，負担も重いので，彼らの生産意欲に影響が出ている。政府はこの問題を解決すべく努力中である。

以上，どの階層も，所得や所有する資産の格差が不断に開いている。社会階層の多元化は，中国社会の流動性が高まっていること，中国社会の構造が発展をとげたことを示している。

３）都市化が急速に進んでいる。

都市化は工業化の必然的な帰結で，地域社会の発展の総体的な趨勢である。改革開放以前，中国の工業化の水準は高くなく一連の政策にも限度があったので，都市化の現象は顕著に現れてはいなかった。1949～1978年にかけて，都市人口の全国総人口に占める割合は，10.6％から17.9％に増加した。30年近い間に7.3％の増加をみたわけである。なかでも60，70年代は長いあいだ，だいたい17％あたりを前後していた。改革開放以来，経済・社会の発展が，都市化を大いに加速した。その現れは二つの方面にわたる。第一は，市・町の数のいちじるしい増加である。1978～1992年のあいだに，中国大陸の市は193から479に増え，14年間に2.48倍になった。町〔建制鎮〕は，1979年に2851だったが，1992年には11985に増えた。13年間で4.2倍である。現在，市・町の総数は，改革初期の4.1倍に増加している。第二は，市・町の人口比率が顕著に上昇したこと。1978～1991年にかけて，市・町の人口が全国総人口に占める比率は17.9％から26.37％に上昇，13年間で8.47％増加した。これは，改革開放前の30年間の数字を上回っている。絶対数から見ても1978～1991年に，全国の市・町の人口は1.7245億人から3.0543億人に，1.3298億人増加した。これは改革以前30年間の増加量の2.16倍である。要するに改革開放以来，毎年900万人もの農村人口が，都市に移住したのだ。

多くの発展途上国と違い，都市に移住した農村人口は主として，大・中都市にではなく，出身地に近い小都市や町に，つまり人びとのよく言う「小城鎮」〔田舎町〕に移動した。われわれはこうした趨勢をも，都市化〔城鎮化〕と呼ぶ。これは中国の実際にマッチした，中国の特色ある都市化のやり方であろう。

都市化の急速な進行は，主として郷鎮企業の大発展による。改革開放以来，中国農村の郷鎮企業の発展は特に注目に値する。1978～1992年，全国の郷鎮企業は152.42社から2000万社以上に増加し，その総生産額は493.07億元から17600億元に，その従業員は2826.56万人から１億人に増加した。現在，郷鎮企業が農村社会の総生産額に占める割合は50％，郷鎮企業の工業生産額が中国の工業総生産額に占める割合は40％を越えている。中でも東部沿海の一部地区や大・中都市の郊外，たとえば天津地区などでは，県・郷鎮企業の総生産額が農村の総生産額に占める割合は80％，郷鎮企業の従業員の農村労働力に占める割合は60％を越えている。郷鎮企業の半分以上が町や農村，規模の比較的大きな村里に集まっているので，その発展に従って農村の余剰労働力がそこに集まるという趨勢が生じ，そういった地域の非農業人口を顕著に増加させるいっぽう，そうした地域の公共施設や地域社会の面目を，いっそう都市化させるようになる。中国の多くの小城鎮はこうした郷鎮企業の発展とともにあるが，これらはもともと農村や規模の大きな村里から発展してきたものなのだ。

上にのべたいくつかの特徴のほかに，家庭の構造が小型化したこと，社会管理が法治化したこと，外来文化を懸命に吸収していることなども，改革開放下の中国社会の特徴であろう。所有の面からみても，いま中国社会は現代化社会に向かって邁進しているところなのだ。

3．中国社会が直面する社会問題

ほかの国家と同じく，改革開放の新時代を迎えた中国も，近代化〔現代化〕の過程で一連の社会問題に直面している。そのうちいくつかは，ずっと以前からいまに至るも解決できない問題で，たとえば人口問題。またいくつかは，改革開放以来はじめて現れた問題だ。以下で掲げるのは，こうした問題である。

１）貧富の分化の問題

80年代以来，中国大陸の各地域や各社会メンバーの間の貧富の格差がいよいよ顕著になっている。統計資料の示すところによれば，1982～1991年のあいだに，中国東部沿海の10省市（北京・天津・上海市，遼寧・吉林・山東・江蘇・浙江・福建・広東省）の工農業総生産額の全国に占める割合は，51.1％から55.39％に増加した。いっぽう中西部の19省・自治区の工農業総生産額の全国に占める割合は，48.9％から44.2％に下降した。その絶対差額は359.84億元から3924.46億元に拡大した。沿海と内陸地域のこうした経済格差は，ますます拡大しつつある。国家情報センターの予測によると，2000年までに，中国大陸沿岸地区の国民総生産が全国に占める割合は1990年よりも５％上昇し，内陸地区の比率は５％低下すると見込まれる。このように80年代以来中国大陸の各社会メンバー間の所得格差は顕著に開いてきている。統計資料の不備と計算の技術的な困難のため，中国大陸の所得配分のジニー係数がどれほどかは見方がまちまちだ。70年代末期に0.2前後だったものが，現在は0.4前後であろうと一般に思われている。ある推測では，中国大陸全体で百万長者（家庭資産額百万元）がすでに100万戸を越えたいっぽう，年間所得が300元に満たない農村人口も6000万人いるという。最近の調査では，人口の５％に満たない高所得階層の貯蓄額が，全貯蓄額の26％を占めるという。銀行筋の分析では，総人口の15～20％の高所得階層の人びとが，60％以上の有価証券を持っているという。

これらの数字から明らかなように，改革開放下の中国で，貧富の格差の問題が発生している。この問題は二つの面から考える必要があろう。ひとつは，現在の中国の貧富の分化が，人びとの生活水準がおしなべて向上しているなかで生じていること。改革以前と比べ，富める者，貧しい者，富める地区，貧しい地区，絶対的な所得水準・生活水準はそれぞれそれなりに向上している。いまの格差はおもに，所得の増加の速度とその幅の問題で，「先に豊かになる」か「後から豊かになる」かの差だ。こうして過去の「おしなべて貧乏」の状態をある程度改め，生産力の発展を促すことができたのだ。もうひとつの面からみると，いまの中国で，貧富の格差の問題は複雑だ。各地区間の格差が生じている原因には，自然条件，人口の素質，歴史の基礎が異なるなどのほかに，政策的な優遇措置が講じられているかの問題がある。各社会メンバーの間の貧富の分化が生じている原因には，経営のよし悪しやよく働くかどうかも重要ではあるが，職権を乱用して私腹を肥やしたり，投機で儲けたり，節税脱税をしたりなどの違法行為も，ひと握りの人間が暴利をむさぼる主な手口となっている。この意味から言うと，中国の貧富の分化は，決して完全な自由競争の結果ではない。合法的な経営，誠実な労働を通じて豊かになりなさいという政府の方針をないがしろにして得られたのである。こうして広大な大衆の不公平感をまねき，社会的矛盾や社会問題を引き起こした。これに対して，中国共産党と中国政府は一連の措置をとり，問題の解決をはかっている。たとえば，経済犯罪の取り締まり，低所得者援助，高所得者に対する重課税などである。

２）「六害」の問題

中国では，売春，迷信，猥褻本，婦女誘拐，賭博，麻薬の６つを「六害」と称する。いずれも，社会に重大な害悪を及ぼすからだ。「六害」の氾濫は世界的な問題で，1949年以前の中国でもかなりひどかった。新中国の建国以後数年を経ずして，こうした問題はほぼ解決した。けれども改革開放以来，こうした醜い現象が再び息を吹き返してきた。たとえば近年，売春が沿海からまたたく間に内地に蔓延し，捕まる売春婦も年々増加している。1990年，全国で捕まった売春婦は13万人で，1991年は20万人，1992年は10数省だけで24万人が捕まっている。

売春の急速な蔓延にともない，性病も増加している。1992年末には，全国の性病は累計で83万例に達した。

またたとえば，婦女誘拐。最近数年，四川，広西，貴州など各省の農村の娘が外地に連れだされ，3000元，4000元，5000元で，各地の嫁の見つからない独身者に売り飛ばされた。1993年６月，北京市公安局は1800名以上の婦女を誘拐した犯罪団の一味を捕まえた。

またたとえば，封建的な迷信。大都市でも農村でも迷信活動が広まっている。ある村では，貧困を脱して富を招くため学校を取り壊して廟を建て，神仏を拝んだ。日照りになると雨乞いをする農民もいる。ある人が10年にわたり調査したところでは，中国の農村には現在少なくとも180万人の巫医がいる。農村の病人の73.9％，都市の病人の17.6％が巫医にみてもらったことがある。これらの巫医は大半が文盲か半文盲で，その「治療」とは，まじないの絵，紙を焼く，魔除け，お祓いのたぐいだ。病人が死んだり誤って死なせたりした人命事件が，20以上の省や自治区で多く発生している。

80年代以来，中国大陸の一部の地区で麻薬が始まった。国務院衛生部の報告では，1992年６月までの麻薬患者の人数は14.8万人である。当然，まだ記録からもれている人数もいると思われる。

猥褻図書や賭博活動も，中国の都市ではめずらしくない。

総じて言うなら，「六害」は改革開放下の中国の社会問題で，その原因はいろいろである。なかでも，外国の腐敗した文物や封建的な残滓の影響，一部の人びとの拝金主義と享楽主義，貧困，無知などがこうした問題の根にある。こうした現象，特に売春に対しては，異なった見方がある。こうした問題は改革開放と不可分で，社会に大きな害を与えるものではなく，一定程度経済を繁栄させる効果もあるという見方もある。だが中国政府と大多数の人民は，「六害」は社会の醜い現象で，自由にのさばらせてはいけないと考えている。そこで近年，各級政府と社会団体は「六害」を批判し，打撃を与える活動を続けており，そのために一連の法規を制定している。

３）一部の政府職員の腐敗の問題

いわゆる腐敗とは，主に，法をまげて私腹を肥やす，贈収賄，職権を利用したゆすりたかり，袖の下，公共財産をくすねる，腐敗堕落などとして表れている。80年代以来こうした現象は，中国の一部

た」

「浜町河岸の女」に登場する佐和という女は、きりっとした肉体を持った存在として、読んでいる方に迫ってくる。「指切り」の小夜、「狸穴スペイン村のサキ」のサキ、そして、「矢尻」の千穂にしても、肉体の存在だけでなく、匂いさえ感じさせてくれる。一般的な女の匂いというのではなく、それぞれに違った肉体と、違った匂いを。

男と一緒に住んでいながら、一度も体の関係を持たずに去っていく佐和。

「これで最後だから、そんな顔しないでよ。初めから言ったでしょ。あんたは薄情そうなところがいいんだからって。そのままでいてよ」

捨てゼリフもなかなかいいが、「そのとき階段を降りていった佐和の下駄の音がチョンチョンと芝居の早間の柝のように鳴り響いたことを、いまでも祐二は昨日のことのように覚えている」と、書いている作者だけではなく、読んでいる方にも、下駄の音が昨日のことのように響いてくるのがいい。

この小説が、ノスタルジックな世界を描きながら、その世界とは無縁な人間も楽しませてくれるのは、「東京」の女を描きだす作者の筆の確かさが、ただ単に古きよき時代としてではなく、時代を現在形で甦らせてくれるからだろう。

軽妙な語り口と、わかりやすい内容は特筆に値する

『中国官僚天国』

王輝著 橋爪大三郎他訳

評者 戸張東夫（産能大学教授）

中国は「人治」の国といわれる。

「人治」の国では、法律にもとづいて国政が行われ、国民生活がいとなまれる法治国とは異なり、法律より指導者の発言や意向が重視される。だから、法律は十分に整備されておらず、また、法律があってもあまり重視されない。

たとえば、中国共産党の最高指導者は江沢民総書記、中国政府のトップは李鵬首相ということになっている。だが、中国最高の権力者として実際に国を動かしているのは、江沢民氏でも李鵬氏でもなく、党と政府の全てのポストから引退した、八十九歳の鄧小平氏だということは誰でも知っている。鄧氏は、いわば超法規的な権力を行使しており、鄧氏の発言が法律になってしまうのである。

また、中国の憲法は、第三五条で「中華人民共和国公民は、言論、出版、集会、結社、行進および示威の自由を有する」と明記している。だが、憲法の、この条文は全くといってよいほど守られていない。

上海在住の作家白樺（バイホア）氏は、八九年民主化要求デモに参加したという理由で、それ以後国内で作品を発表できなくなってしまったし、北京における学生や市民の平和的な民主化要求デモも、八九年六月四日当局によって武力鎮圧されてしまった。

これが、「人治」の国、中国の現実なのである。

数千年におよぶ封建制度の影響もあって、「法治」の国になかなか脱皮できない、このような中国の政治と社会の悪弊（やまい）を、官僚制度と官僚主義の病として告発したのが本書である。

指示や判断を求める書類を読んだしるしに意味不明のマルを書くだけで、明確な意思表示をしない幹部、不適任な幹部を外に出すことも、必要な人材を外から招くこともできない党、政府機関、根深い官僚優位の考え方など、中国の実情にあまりくわしくない読者には信じ難いようなケースが、これでもか、これでもか、といったぐあいに次々に描き出されていく。

著者の王輝（ワンホイ）氏は、天津社会科学院院長で、天津市全人代の常務委員を兼任している社会学者。だが本書は、学術的な研究書というより、ジャーナリストの書いた時事評論といった感じだ。いささか網羅的に過ぎるきらいがないでもないが、具体的な例が豊富に盛り込まれているので説得的である。

また、著者の、民衆の間でささやかれる官僚主義批判の流行語やざれ歌を随所に引用した軽妙な語り口と、わかりやすい内容は特筆にあたいしよう。これは、本書の最大の身上（しんじょう）になっているといっても決して言い過ぎではないと思う。

この功績は、なんといっても先ず第一に原著者に帰すべきものだが、原著の味わいを、できるだけ正確に日本の読者に伝えようとした訳者の努力もまた見逃すことはできない。

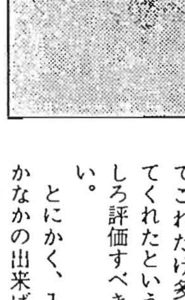
しかし、「人治」に象徴されるような、中国の封建時代の制度や慣習が、社会主義の新中国でなぜ拡大再生産されたのか、といった核心に触れる問題にはほとんど取り組んでいない。

作家の劉賓雁（リュウビンイェン）氏や民主化運動の活動家李一哲（リイイチォ）氏ら、中国の反体制派の人たちの、辛口の論述に接したことのある読者のなかには、あるいは物足りなさを感じる向きもあるかも知れない。

正直にいって、評者もそのような読後感を禁じ得なかった。

だが、「当事者は語らない」を最大の美徳とする、ことなかれ主義がいまなお幅をきかす中国である。中国の官僚機構の末端で多年生活してきた王輝氏のような人物が、中国のゆがんだ官僚主義の問題点についてこれだけ多くのことを語ってくれたという点を、いまはむしろ評価すべきなのかも知れない。

とにかく、入門書としてはなかなかの出来ばえなのだから。



岩波書店 1600円

5月22日(日曜日)

『日本経済新聞』1994年5月22日

中国官僚天国

王輝著

体験ふまえ、「官本位」えぐる

日本の官僚への批判が世界的ブームとなった感がある。しかし世界で最も早く巨大な官僚制度を作り上げいまだに言論・報道の自由や自由選挙のない中国大陸では、官僚の生態は日本よりはるかにすさまじい。天津市の官僚としてかなり高い地位まで昇進したことのある社会学者が、体験談と反省も交えて中国の官僚の実態をえぐった。

一例は「会議に便乗して物見遊山」する現象だ。夏は涼しい東北で、冬は暖かい南方で会議を開くという「渡り鳥」方式は、中国の官僚社会では常識。八四年の鉄道部門の調査によれば、会議のための出張で鉄道を利用した乗客数は全乗客の三四・五%に達した。会議のための出張を三分の一減らせば鉄道旅客輸送量は年間のべ二億人減る。

貪婪（どんらん）な官僚たちの生態の紹介に加え、中国ならではの豊かな漢字表現も本書の魅力。たとえば公文書の山は「文山」、会議だらけの状況は「会海」。官僚社会の等級制度が企業や研究機関などにも浸透している状況は「官本位」制、と呼ぶ。

原著の出版は天安門事件直前の八九年三月。当時物品の横流しなどでもうける官僚たちに対する批判は厳しく、民主化要求運動も官僚の腐敗への批判が大きな動機だった。中国の人々にとって不幸なことに、現在も状況は変わっていない。部分的な規制緩和や不動産の商品化の伸展、金融市場の発達などによって、官僚たちの腐敗はむしろ多様化し拡大している。指導部は九三年後半「政権の命運にかかわる」（江沢民総書記）との危機意識をもって腐敗撲滅運動や官僚機構の簡素化に着手した。橋爪大三郎訳。（岩波書店・一、六〇〇円）

の政府職員の間につねにあり，蔓延してきた。1982～1992年の10年間，全国の検察機関が捜査・立件した贈収賄事件は36万件以上，経済的な損失は10億元にのぼる。国家統計局の推定では，1992年，全国のホテルやレストランの売上げの60～70%は公費の接待である。同年，全国各地の公費による接待，リベート，贈り物，公費の旅行などの支出の合計は803億元にのぼった。これは上半期の国家財政収入の22.24%に相当する。ここ数年の政府職員の腐敗は，中国建国以来どの時期よりもひどい。腐敗は，公衆のなかでの党と政府のあり方に，大きな影響を与える。腐敗現象の主な原因には，次のものがある。第1に，権力に対する厳格な拘束が欠けていること。中国の経済改革が進展したわりに，政治体制の変革のほうは停滞している。現行の政治体制には権力に対する厳格な監督のメカニズムが欠けている。各級の司法機関は，判決を作成する途中で往々指導者たちの干渉をうけ，相対的独立が保証されていない。

ニュースを伝達するメディアも，世論による監督機能を発揮できる条件に欠けている。党と政府は広範な民衆に呼びかけて，官僚の腐敗行為を検挙するように激励してきたが，人びとは仕返しを恐れて，なかなか腐敗を通報しない。そのため，権力はいまだに厳格な監視を受けることができないでいる。監督を受けない権力は腐敗する。厳格な監督を受けない権力は必然的に腐敗現象を生み出す。

第2に，現在中国では，経済・文化・価値観が急変しているため，多くの新たな問題や状況が生じている。これにどう対処すればよいか，人びとの認識は一致しておらず，党と政府も穏当で科学的な対策を打ち出せないでいる。以前に制定された法規，政策，社会規範は，最近の状況に適合していない。政府職員の紀律も弛緩しており，法律と政策の「真空地帯」となっている。例えば，拿回扣〔取引高に応じた払戻しなど，闇リベート〕は正当なのかどうか，法律も政策も明確な規定がなく，人びとの見方も一致しない。時期や地区ごとにこうした問題を処理する規準もまちまちなため，腐敗現象がこれに乗じて広まってしまう。

第3に，最近の数年間，中国は新旧体制の交替期にあたり，両体制が併存するため，政府職員の腐敗行為が起こりやすい。国務院研究センターのある研究者の推測によると，中国全土で，権力に関係のある人びとが価格の双軌制〔計画経済の価格と自由市場の価格との二本立て〕を利用して毎年不当にえている所得は，約1600億元にものぼる。

第4に，改革開放以来，各種の腐敗思想の影響で，拝金主義，享楽主義，極端な個人主義が一部の政府職員のあいだに広まっていることも，原因のひとつだ。現在，党と政府は反腐敗闘争を繰り広げている。この闘争は，長期にわたって続けなければならない。

ほかにも，教育問題，劣悪なインチキ商品の氾濫，農業と農民の問題，犯罪問題，社会秩序の問題などもあるが，時間の関係でのべないことにする。

『 5ﾆ 部倫 [要』 32集 東京… 等学 理 社会研…会 1… 3.2…

第二回研究例会 講 演

変容する社会の社会科(学)

―ポスト冷戦世界と日本の選択―

東京工業大学助教授 橋 爪 大三郎

1. ポスト冷戦世界とは何か

20世紀後半の50年間世界は冷戦構造の中で動いておりまして、それは、社会や世界をみる物の見方を大きく規定していたと思うわけです。日本は、自由主義体制の一員として、アメリカの子分となることによってしか、貿易の利益を享受できなかった。しかし、この役割は終わり、米国が相対的に停滞し、旧敗戦国の日独が経済大国への道を歩き、ソ連が崩壊した。こうしてポスト冷戦世界を迎える。このような戦後世界の現実を日本の社会科学者はきちんとみすえて分析していただろうか。私は、この現実をみすえる力が弱かったと思います。それは、言論界、知識界の中にマルクス主義の影響が非常に強く、バランスを失していたからではないでしょうか。冷戦の崩壊で、日本の制度のあらゆる部分を国際社会的なフォーマットにつくりかえて風通しの良い国にすることが今求められていることではないか。対処療法でなく根幹において国際化が求められているのではないかと思います。

2. 社会科(学)教育とは何(だった)か

まず、社会科学は、科学の一種です。科学の定義は難しいが仮説を立てそれを実験によって確かめる行動をいうのです。この科学の特徴は、誰がやっても同じ結果になるということです。ある人間の特定の価値観や価値判断から独立である。社会科学というのは、社会についての科学的研究であり、対象は社会だが、方法は科学である。科学は、自然科学と同じだが、社会は、人間の行為から成り立ち、価値判断を含む(ルール、慈善等)文化的、相対的なものであり、このことに充分到達していないと、社会科学は成立しません。価値を体得しない限り、ほんとうは、客観的追求そのものもできない。これは、社会科学にとって永遠の問題でもあります。社会とは、価値的であるととらえるのが社会科であり、単なる知識ではなく実践である。知識とは、市民としての行動様式の修得である。このルールの修得として知識を教えるのであって、知識それ自体が価値があるのではない。高校においては、歴史、地理、政治・経済は、知識としての要素が強く、生徒さんも理解しやすい。しかし、現社、倫理社会は、大学の社会科学のどれにあたるかあまりはっきりして

1994-3-16/22

いないように私は思います。これのみならず、知識として修得するのか、プラクティスとして修得するのかあいまいなわけです。知識としてならあまり意味がないがこれに還元しようとする強固な傾向があり、生徒さんもそう考えます。社会科の中に、価値判断があってはならないとして、価値判断を避けてしまう。しかし、これを避けるとプラクテイスの問題には致達しないのです。それは、現代史にたどりつかず、宗教はとばしてしまうところにあらわれている。具体的に説明しますとまず「戦争責任はなぜ教えにくいか」というと、日本人は戦争を反省したが、それは、「戦争を起こしたのは、自分達ではない」と誤解しているからです。ほんとうは、「それは君達の問題であり、私達の問題である」ところから出発すべきなのです。戦争犯罪とは、個々人の責任行為であり、この追求で戦争責任が終わるわけではない。「日本はアメリカの戦争責任を問えるか」は討論のいい材料になるでしょう。次に、「憲法はなぜ教えにくいか」ですが、「憲法が大切」と教えるだけでは、憲法が置物になってしまいます。憲法は、まず、命令ではなく人々が自分の為に自分で守るルールです。そこで権力者との契約と法の支配が出てくる。この三つの要素から成る構造を教えるべきで、内容を教えても誤解を深めてしまうのです。また、「民主主義について」は皆が仲良くないことを前提とした高度な制度であって、人間の自然な感情を逆なですることが非常に多い。演習問題として「民主主義を否定する思想の自由があるかどうか」「少数意見の尊重の意義はあるのか」「クリントン大統領はなぜ議会の解散を宣言したエリツィン大統領を支持したのか」がおもしろい。次に、「差別」ですが、日本人は、素朴に差別はあってはならないと考えているが、そこがくせものでして、そう考えているがゆえに差別が生まれるところがある。自分の問題にひきさげることが必要ですが、日本人は相対として、他民族に差別されたということがない。そこで、個々人の多様性を認めたうえでそれをどう平等に扱ったらよいかで考えた方がよいのではないか。それを法の下の平等という形で、区別せず差別に抵抗する心理的メカニズムに焦点をしぼることが大切なのです。「国連」というのは教えにくい。憲法9条は「戦争放棄」をうたっておりまして、これは、集団安全保障を認めるものではないのですが、国連に加盟した以上は、軍事同盟に加盟したこととほぼ同じ効果がありますので、必要な義務を果たさなかった時は、いろいろな矛盾がおこってくる。この現実を教室で教えることはかなり難しい。社会科教育というのは、知識としては、問題なくても生きた知識として身につけようとすると、たちどころに身動きがとれない構造になっているわけで、これ

を生徒さんにわかってもらうことは大変だなと思います。

3. 社会科(学)教育の目的とは何か

社会科教育の目的は、自立した市民を育てることにあると思います。自立した市民というのは、自分のルール、マナー、決断力を持っています。市民は庶民ではなく、市民社会の構成員であり、法を創り出す主権者です。人間関係にある矛盾を調整する為に法をつくり、これを守ろうと約束します。法を守りつつ法をつくり、ルール、マナー、決断を身につけることが公民教育の目的です。公民教育は知識ではなく、プラクテイス(決断)です。個々具体的状況で原理原則に基づき、個別の判断を下せるかということです。未熟でも自分で判断を下すことが一番大切なことでここに焦点をあてたケースメソッドを考えなければいけないのです。ケースメソッドは、市民の判断を支援するツールとしてやるわけです。「憲法を否定し、政府の転覆を図る陰謀集団が集まっている。どうしたらいいか」「服部君の射殺事件があった、あなたはどう裁決を下す?」「ちびくろサンボが絶版になることにあなたは賛成?反対?」こうした問題をネットワークで交換しあえればよいと思います。次にデイベートの効用ですが、結論ではなく、それに至るプロセスが大切です。とにかく自分の意見をのべることから出発します。そこに、関心、知識、決断、試行錯誤のプロセスがあり、そのあとで文章の課題を出すと、レベルの高い奥行きのある作品がたくさんかえってきます。

社会科(学)教育において教師と生徒の関係はどうあるべきか、小中学校においては、教師は権威(信頼できる人)を持っている。それに比べて、高等学校では、教師は、権威の所在を示す媒介者であり権威の所在はテキストや学説である。なぜある事柄が「正しい」とされるのか、その理由を説明できることが公民教育の役割ではないか。あとは、生徒の経験と判断で思考錯誤でやる。自分で何事かを組み立てることが大切であり、仮空のシュミレーションを解決してゆく力を身につけることが大切です。社会というものは、価値観とルールをもって実践的に動いているものです。そして、高校で、そのことを身につけた者がメンバーとなることによってその社会のルールと価値観が再生産されてゆくというわけです。ですから、その教育が途だえたなら、社会のルールが崩れ価値観が変わってしまって社会は別のものに変質してしまうのです。日本が自らの社会をコントロールし、国際的責任を果たし、自分の社会を改革してゆく為には、こういうことが必要なのです。

(文責 都立玉川高等学校 山本 正)

1994-3-17/22

『アドバタイジング』第39巻第5号通巻 454号（94年5月号）pp. 26-29　電通

スポーツが創るニューパラダイム

——スポーツがライフスタイルを変える

Sports Marketing New Paradigm

東京工業大学助教授
橋爪大三郎

はしづめ・だいさぶろう　1948年神奈川県に生まれる。東京大学文学部社会学科卒業後、同大学大学院博士課程（社会学専攻）単位取得後退学。1989年から、東京工業大学工学部助教授（社会学）。著書に、『現代思想はいま何を考えればよいのか』『冒険としての社会学』『はじめての構造主義』などがある。

第1回世界少年サッカー大会「ミロ・カップ」（1987年）

なぜ、今、スポーツがこんなに人気があるのか、中でもJリーグ人気の背景にあるものは何だろうか。社会、経済、政治、文化などさまざまな領域から読み解いてみたい。

●衛星放送になって、アメリカのスポーツ支配が崩れた

まず出発点はメディア、つまりテレビの変化でしょう。テレビはご存じの通り、一九五〇年代から九〇年ぐらいまでは専ら地上波を使っていた。地上波というのは、テレビ塔を建てて、周辺三〇〇キロに番組を提供するわけです。テレビ塔が増えれば、ネットワークができる。こうして世界各国に地上波のネットワークができたけれど、地上波は国境を越える必然性がない。ローカルなのです。

一九八八年に、衛星放送が始まった。衛星放送は、衛星とパラボラアンテナさえあれば、ネットワークはいらない。しかも世界同時に二四時間放送が可能になる。まさに世界的なメディアです。また、ネットワークに比べて、チャンネル数が多い。要するに、テレビのキャパシティがすごく増えてしまった。

そこで、テレビの構造が、とくにテレビに何を乗せるかが、ドラスチックに変化していく。まず、ソフトが不足します。ソフトは四つあると思う。一つ目は映画に代表されるフィクション。これは製作コストがかかるので、新しいソフトを次々に提供していくことは難しい。二つ目は音楽ですが、音楽は個人の嗜好が強く、番組構成に反復性が強いので、これもあまりニューメディアには適さない。三つ目はニュースや科学番組に代表されるノンフィクション。すでにCNN（アメリカ）やBBC（ヨーロッパ）ができているが、何チャンネルもなくてもいいので、キャパシティを埋められない。そして四つ目がスポーツ。スポーツはフィクションでも、ノンフィクションでもない。スポーツはゲームなのです。しかも、勝つか、負けるかという永遠の反復でありながら、映画や音楽とちがって、その度ごとに固有のストーリーがある。スポーツは言ってみれば戦争に似ています。結果は分からない。結果が分かっていく過程で、スリルとカタルシスが得られる。しかもそのプロセスを目撃することで、自分も参加しているような気分になれる。かつての湾岸戦争時の視聴率に見られるように、ニューメディアに非常に適合的なわけです。

では、このニューメディアにどういうスポーツを乗せるか。一年中やっていて、いつでも放送できる、しかもリーグ戦というのが望ましい。それで世界性のあるスポーツは何かと言えば、最もその条件に適合したのが、サッカーだったのではないか。

地上波の時代は、アメリカのナショナルインタレストによって、アメリカの三大ネットワークで中継する価値のあるスポーツが世界スポーツであるかのような印象を与えた。野球を筆頭に、アメリカンフットボール、バスケットボールです。しかし、衛星の時代になってくると、そのエゴが通らない。アメリカのスポーツ支配が崩れてくる。

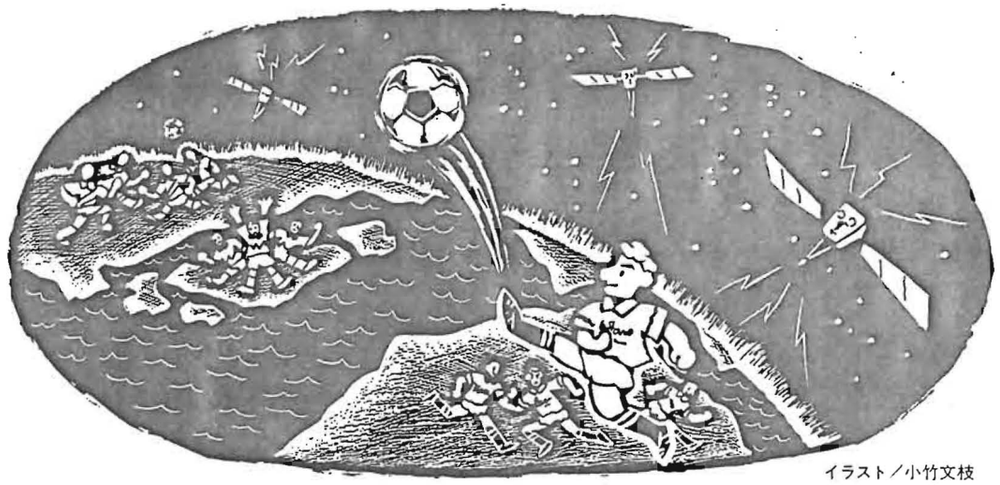
実際、サッカーは、北方のゲルマン、アングロサクソン系の国、南方のラテン系および中国、北朝鮮もやっている。これを全くやらない国というのは、あまりない。

たまたま九〇年のイタリアのワールドカップのとき、NHKが衛星放送の受信を増やすために猛烈なキャンペーンを行なった。それで衛星放送の受像機が飛躍的に増えて、九〇年のイタリアのワールドカップを衛星放送で見たという層が増えた。

八九、九〇年というのは、バブルが崩壊した時期でもあった。いろいろな意味でターニングポイントであり、何かが待ち望まれていた時期でした。結果的にそれがかみ合ったということは、そこに何らかの歴史の必然があったのだろう。

●潜在的なサッカー人口に、火がついた

ここでは、野球と比較しながら、サッカーの国際性を検討してみたい。なぜ、野球はサッカーの持っているような国際



イラスト／小竹文枝

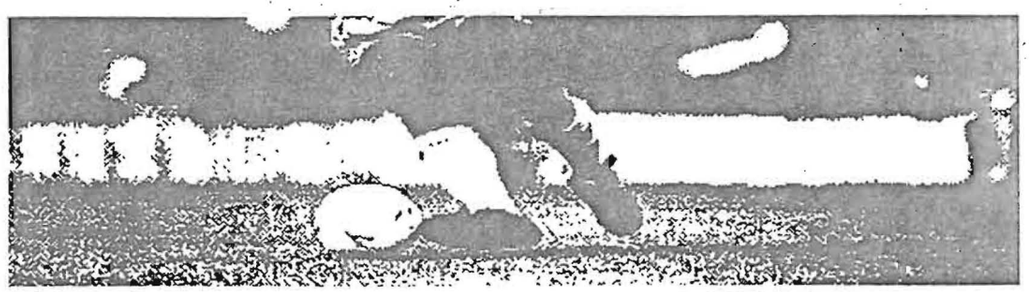
1994-3-18/22

性、世界性のルートを獲得するのは難しいのか。

野球は一種の布教のようにして広まる。ミッションなりを派遣して、まずその国に野球チームを植えつける。中国にも行ったようだが、なかなか難しい。なぜか。まず、ルールが多い。また、ユニホームやバット、グラブだとか、装備や施設にお金がかかる。一方のサッカーはルールが少ない。最初は一七しかなかった。制服や靴もなしでもすませる。要するに二二人にボールが一個あればいい。ゲームの人数も、五対五とか、八対八のように、フレキシブルに変えられるわけです。

ということで、第三世界向きだ。空き地とゴールがあればいい。しかも個人技が、わりあい目立つわけです。つまり上昇志向に結びつきやすい。有名になれば、階層移動が実現でき、収入のチャンスにもなる。ハングリーの精神で集中できる。

また、ゲーム自体の構造に不確実の要素を取り入れて面白くしている。まず、ゴールが小さい上に、ゴールキーパーという妨害者がいる。一瞬の油断などのような、不確実な要素がうまく重ならないと点が入らない。しかも一試合に数点、野球に比べると極めて得点が少ないわけです。



ゲームの時間というものもある。野球は時間に関するルールがないでしょう。アメリカンフットボールやラグビーは時計は回っているけど、ズタズタ切られている。サッカーだけは、いつでもオンタイム。したがって、ゲーム時間が延長して、その後の定時番組に差し支えることがない。つまり、番組の送り手にはとても都合がいい。

サッカーブームの直接のきっかけはJリーグだが、そのかなり前から子どものサッカーブームがあった。チーム数で言えば、野球より数が多かったのではないか。しかし、地上波のテレビが支配している間は、野球や相撲のような戦後のエスタブリッシュト・スポーツをかいくぐってサッカーが出る幕がなかった。フラストレーションがたまっていたところに、衛星放送がひきがねとなって、一気に爆発したと言えよう。

もちろん、こうしたサッカーブームの受け皿としての、新社会資本、インフラストラクチャーがある。今までのように、橋や道路を作るのではなくて、何か新しいものを作りたい。既得権や許認可のいらないもので何かないだろうか。あった、サッカー場だ。地域振興にもなるし、ワールドカップもくるかもしれない。ということで、スタジアムが作られる。このままで行くと、たぶん各自治体に一個ずつできることになるでしょう。

Jリーグは政治改革、ライフスタイル改革である

ここで少し、政治的な視点からサッカーブームを検証してみたいわけです。政治に例えれば、自民党は、国内ネットワーク。各県の利害や、各省の利害を上手に丸く収まるようにする政治家が必要だった。そこで自民党というネットワークをこしらえてやってきたが、どうもそれがこのところ上手く行かなくなった。五五年体制が行き詰まって、新しい体制が模索されていたわけです。

そこで、じゃどういう政治システム、利害の調整システムがあるだろうか。いくつか条件があるけど、今まで無視されていた人間の声を聞いてみよう。そうすると政権が交代して野党が表舞台に登場した。

今まで日本国内のメディアは、自民党・官界・財界の三位一体のもと、企業社会と密着していた。衛星通信メディアは、そういうドメスチックな論理を本来はみでるものなのです。だからこれまでの理由づけでは説明できない現象が生まれてくる。大相撲や野球人気がサッカーに移行する必然は見えなかったのに、そうなってしまったのは連立政権と多少似ているところがあるかもしれない。Jリーグは言ってみれば、スポーツの政治改革と言えるのかもしれません。

Jリーグは、国際規格、そこが重要なわけです。日本の野球はドメスチックで、企業社会そのもの。年功序列やヒエラルキーがあり、九つの異なったポジションがある。だれがチームのためにどういう役割を遂行したかというストーリーが求められます。一方、サッカーは、攻撃と守備の区別もあまりない。その場、その場で機敏に状況に対応していくのが原則である。全員守備、全員攻撃。従って、一人ひとりにスポットがあたりやすい。風通しがいい。野性的で、点をとれればいいじゃないかという原始的なエネルギーがあります。野球の場合はいつのまにか、ピッチャーなどポジション別のロジックが出てきて、何のためにやってるんだか分からなくなりがちだ。

サッカーの競技場によくフェイスペイントをした若い人たちを見かけます。もっとも、最近はおばさんたちもフェイスペイントをして大騒ぎしているみたいですけどね。スポーツは、現実であって、現実でない。音楽の場合は擬似イベントなどと言うでしょう。そういう性格をスポーツは持っている。つまりお祭りです。フェイスペイントと言うと新しいけど、昔、お祭りで白粉を顔に塗ったりしたでしょう。あれと同じだ。

フェイスペイントして盛り上がるサポーター(1993年)(写真提供／共同通信社)

世界性のあるメディアに一番敏感にチャンネルインしていくのも、企業社会に組みこまれてしまう以前の若者たちだ。彼らはおそらく社会人になったとしても、企業にドメスチックにのめり込んでしまうことは少ないのではないか。会社以外にも地域社会があるじゃないかとか、うちの会社は何なんだとかいう気分があるような気がする。

そういう意味では川淵さんがおっしゃるように、Jリーグは、それを突破口にして、スポーツをライフスタイルの中に組み込んでしまうのかもしれません。まさに、〝スポーツは文化である〟のです。今後、スポーツはいろいろな分野で、これまで以上に行政と関わりを持つようになるのでしょう。

1994-3-19/22

特集 大学ノススメ

大学は変わります

大学教授からの大学改革論・大学が変われば日本も変わる

橋爪大三郎氏(東工大教授)インタビュー

――教育機関としての大学という面からみて、教える立場から必要と感じる改革は何でしょうか。

まず第一に大学の定員制の廃止。大学には設置基準というのがあって、国立大学などでは定員より数%多く取っても少なく取っても怒られるわけです。また卒業者が入学定員に比べて少ないと怒られるわけだ。ということはつまり、入れた学生をみんな卒業させなさいというんだけれども、こんな馬鹿げた話はない。

第二に、入試の廃止。問題は卒業する人間の質と量ですから、入試で絞るよりも卒業で絞る。これが教育機関の本来の姿ですから、入試をなんとかやめる。そのかわり卒業の試験や単位カリキュラムなどの教育のクオリティーで勝負できるようにする。

第三に、以上のふたつを監督するのは文部省ですが、こういうものがあるからいけないんで、文部省による監督はやめる。別な言い方をすると国立大学は民営に移行した方がいい。民営に移行しても文部省があると、大学設置基準とか私学助成金などで干渉しない方が良い。

――定員制の弊害は何ですか。

簡単に言うと不可がつけられないんですよ。個々別々の単位では不可をつけることができますが、あっちでもこっちでも不可がついてしまって単位が取れない学生が、一、二%ならいいんですが、五%、十%となるとその大学の存亡にかかわってくる。そうすると水増しになってしまう。

高校の時に一生懸命勉強したから、大学に入っているわけでしょう。だから大学で一生懸命勉強したらいい卒業生になるわけであって、高校の勉強と大学の勉強とあんまり関係ないわけですよ。

――民営化に伴い、入試の存在はどうなるのでしょうか。

とりあえず全員入れる。全員入れるとなぜ今成り立たないかというと、入学者が大学のコストを全部負担していないから。国立大学の場合年間数十万円で約10%以下。総経費の7~8%ぐらい。ということは入学者が増えれば増えるほど大学は赤字になってしまう。私立大学はますますそう。だから学生が入ればいればいけない。卒業生はトータルでたくさんお金を稼いで、社会に貢献していくわけですから、その給料から将来返してもらえばいい訳で、親が払うことはない。で、コスト感覚がきちんとつき、その大学に行く値打ちがあるかどうかを考える点でもたいへんよろしい。

成績が良ければ、月謝をどんどん安くする。そうすると、全員に甘い点数をつけることは出来ませんから、何%かの人を安くすることなり、成績というものが極めて厳格なものになる。学力が伸びない人はお荷物なわけですから、高い月謝を払えば良いのです。

そうすると、いいのは、どの大学にも優秀な学生がいるということがまず生まれる点。どの大学にもトップの奨学金をもらっている人は皆優秀なひとで甲乙つけがたいというふうになるなるわけです。それからいわゆるブランドの有名大学でも、高い月謝を払って、そのブランドがほしくているだけみたいな人は入ったことないということになる。大学ブランドというのは入試とくっついているんだけど、それにかわるものがなかったら就職差別も入学格差もなくならない。代わるものは何か。奨学金だと。奨学金があれば、大学の成績と連動しているわけだから、高校の成績で決めるよりは、はるかに合理的ですよね。そうして入学試験はなくなる。

――そうなると高校の勉強というのは、かなり違ったものになりますよね。

そう、高校は基礎知識を勉強する普通教育をする場になります。普通教育というのは、あるレベルがあってそれをクリアしていればいいという考え方です。

だから、余裕を持って80点をクリアするためにちょっと勉強して85点とか90点を取れば大丈夫ですよね。そういうふうに勉強します。だから80点以上だったらもう分かっているということですから、85点の人より90点の人の方ができるとか、91点の方がもっといいというのは無駄ですよ。そんなエネルギーがあったら他のことをやればいいんだから。というわけで資格試験にすべきだと思います。

――大学生にとって一番必要なことは何でしょうか。

大学生にとって一番必要なものは授業料。だけど学生さんというのはまだ働いていないので親に依存するんだけど、これは変だから、奨学金とかにかく授業料というものをきちんと保証する経済的な基盤、システムというのが一番肝心なことですね。と同時に自分自身が払うことでコスト意識が生まれる。

次にその授業料を払ってまで大学に行くのは、どういう目的に依るのかという、目的意識。

三番目に学力なんですが、学力というのはなくてもいいんですよ。これは月謝と目的意識があれば大学がつけるんであって。今大学というのは、一部のエリートを養成するためのものではなくて、原則として国民すべてに開かれているわけだから、そういう大学程度の知識は目的意識のある人には、つけさせてあげましょうと。これが大学のわけですから、まあ学力は養成すべきものです。そういうものは大学でゆっくり伸ばせばいいのです。

プロフィール

橋爪大三郎(ハシヅメ ダイサブロウ)

東京工業大学工学部助教授。社会学科専攻。

著書には「はじめての構造主義」「冒険としての社会科学」「民主主義は最高の政治制度である」、鷲田小彌太氏との共著「大学は変わります」など。

1994-3-20/22

『ちくま』第 282号（1994年 9月号）pp. 16-17　筑摩書房

エロスと批評

——竹田青嗣さんの資質について

橋爪大三郎

竹田青嗣さんの資質をあえてひとことで言えば、柔軟でしなやかな部分と堅固でかっしりした部分とがほどよく組みあわさっていることではないかと思う。

これだけではわからないと思うのでもう少し説明すると、誰にでも柔軟な部分と堅固な部分はある。でもたいていの場合、外側が堅固で異質なものを寄せつけないくせに、内側は弛緩していておのれの外見を裏切っているという、昆虫やカニ（甲殻類）みたいな構造になっている。（瀬尾育生さんならこれを、スターリニストと形容するところだ。）竹田青嗣さんの場合、これがあべこべで、外側が柔軟で他者に対してどこまでも開かれているいっぽう、内側には堅牢な構造物があり、彼の思想を支える骨組みとなっている。そこで竹田さんとつき合った人は、ストイックで倫理的だなあという印象を受けることになる。こういう「外柔内剛」の構造は、人間のあり方としても知性のあり方としてもごく自然な、望ましいものだが、それがじつに自然に身についているという感じがするのは竹田さんだ。

竹田青嗣さんの外側をかたちづくっている、他者に対する鋭い感受性は、一般に、青年期に特有のものだ。だから竹田さんは、変わらぬ若さを感じさせる。それが竹田さんのスタイルになったのには、日本人でないという国籍も関係あるのかもしれない。いっぽう内側の堅牢な構造物は、灰分が沈着するように、だんだんに竹田さんのライフスタイルのなかで蓄積されていったものだ。それはイデオロギーでないが、イデオロギーより強靭で、竹田さんの存在そのものと一体化している。

＊

こういう竹田さんが、「エロス」というキーワードで自分の思想を語っているあたりが、私には興味ぶかい。

エロスとは、①よいもので、②各個人のもので、③それをよりよく充実させるのに他者との関係が欠かせないもの。功利主義のいう効用や欲望と似ているが、個人と社会をつなぐ接点となるところ（③の性質より）が異なっている。

マルクス主義にもエロスに類似した「人間の類的本質」という概念があった。それがエロスと違うのは、社会関係のなかで「疎外」されざるをえないと考えられていることだ。市民社会にいる限り、その充実を求めるわけにはいかないのである。

竹田さんも、こうしたイデオロギーをまとって市民社会に身構えた、甲殻類のような時期があった。しかしそれでは、市民社会を「欲望の体系」として否定するばかりで、自己充実を構想することができない。竹田さんはそこを悩み抜くことで、甲殻類から骨格動物にみごとな変容をとげたのだ。竹田さんのエロスということばは、柔軟に他者を受け入れる外側から堅牢な内側にまで、往復運動のルートが確実に開かれているという信頼感を覚えさせる。それは言いかえれば竹田さんが、自己肯定と自己批判の適切な回路をそなえているということでもある。

＊

対象に対する愛着と批判性とが適度に混じりあっていることが望ましい批評家という職分ほど、だから、竹田さんにとってうってつけのものはなかった。竹田さんの批評は、その背後に美的でエロス的な感性をたたえている場合に、もっともその本領を発揮する。『陽水の快楽』『ニューミュージックの美神たち』などといった仕事があるのも、偶然ではない。

竹田青嗣さんが自分でバンドを率いて唱ったり、カラオケを愛好したりするというのも、自分の身体のかかえるエロス的感性を（批評しながら）肯定する行為として、納得できるように思う。竹田さんの代表的なレパートリーは井上陽水だが、まず前提として、繰り返し聴きこんでは分析するというプロセスが先行している。そして聴いてみると、陽水の「もの真似」ではないが陽水に「似ている」という微妙な唱い方だ。陽水の歌を（自分の気分や身体のコンディションに合わせて）うまく唱っている竹田さん、というスタンスをキープしている。カラオケにはそういう、表現の直接性とは一線を画する批評性が具わっている。

こういう竹田さんの資質は、多くの読者の共感をよんで、ポスト冷戦時代の思想界にひとつの潮流をつくった。いまはポスト冷戦が国内の構造を変動させつつある時期だが、そこでも竹田さんの思想が有益な指針となることを期待したい。

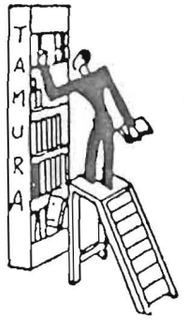
（はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学助教授・社会学）

ちくま新書
ニーチェ入門
竹田青嗣
680円

ご蔵書をお譲り下さい

☆探求書
●柳宗悦全集　筑摩書房
●民芸大鑑　〃
●有島武郎全集　〃
●八木重吉全集　〃
●姓氏家系大辞典　角川書店
●日本書紀総索引　〃
●呻吟語　明徳出版
●本朝文粋註釈　冨山房
●宮川淳著作集　美術出版
●白洲正子著作集　青土社
●定本原民喜全集　〃
●ドイツ文学辞典　河出書房
●フォークナー全集 既刊分　冨山房
●シュヴァイツアー著作集　白水社
●ペスターロッチ全集　平凡社
●哲学、思想、キリスト教、仏教
●日本史、東西洋史、法律、政治、社会
●言語、国語、国文学、近代文学評論
●小説、詩歌句集、随筆、趣味
●外国文学翻訳、美術、映画
●英独仏の文科系洋書、語学

全国各地へ出張いたします
地方からのご発送は送料を負担します
●当店のご案内は
新潮社「波」
岩波書店「図書」もご参照下さい。



東京都千代田区神田神保町1-7
田村書店
☎03(3291)0563-4

1994-3-21/22

（94年12月1日発行）
『単行本・文庫本ベスト3』リテレール別冊8　pp. 114　メタローグ

橋爪大三郎

❶ 大室幹雄『檻獄都市――中世中国の世界と芝居と革命』（三省堂）
❷ 辻井喬『虹の岬』（中央公論社）
❸ 新山一郎『相撲の歴史』（山川出版社）

❶ 森嶋通夫「思想としての近代経済学」（岩波新書）
❷ 江藤淳「成熟と喪失――〝母〟の崩壊」（講談社文芸文庫）
❸ ベンヤミン「ベンヤミンの仕事」1・2（野村修編訳、岩波文庫）

山ほど本を読んでいるわけでなし、まして「ベスト……」と優劣をつけるなど能力外のこと。手近のなかから、私に新しい世界を垣間見させてくれたもの三点をあげる。

大室氏の浩瀚なシリーズは、『劇場都市』『桃源の夢想』『園林都市』『干潟幻想』と続き、ついに五冊目。古代から説き進め、ようやく時代は唐代長安に到った。

氏の書物はさながら、メタ書物とも言うべきものである。古今東西の文献を渉猟しつくし、現在知りうるあらゆるデータと方法論とを融かし合わせ、醱酵させて出来あがっている。日本の重大な隣国である、中国という異文明の全体像に、どこまでも肉薄しようという強固な意志。日本の産業文明をアジア文化のなかに謙虚に位置づけ直すために、こうした仕事は欠かせない前提になる。

辻井喬氏の『虹の岬』は、著名な歌人で住友財閥の経営者でもあった川田順と、京大教授夫人との宿命的な恋を題材にした小説である。著者（＝堤清二氏）の境遇を考えれば、川田順のなかに著者の自己像が投影されていると、読者は想像したくなるかもしれない。それを承知のうえで、著者は淡々と、「ひとつの時代」が終わった混乱のなかで、あえて具体的な一人の女性を愛する道を選んだ男性の内面を描いていく。それは一種の「撤退」とも思えるのだが、川田はこの小説のなかで自分の行動を完全に合理的に説明できないでいる。そのもどかしさは、今、もう「ひとつの時代」が終わろうとするとき、その先の道をさぐりかねているわれわれのもどかしさでもあるのだ。

新田一郎氏の『相撲の歴史』は、近代大相撲が成立するまでの、相撲の多様な変遷を、厳密な歴史学の手法で再構成する、はじめての試みである。ここで描かれる相撲は、時をさかのぼるほど、アジアの民俗のなかにひろく拡散していき、読者は相撲／相撲でないものの区別の曖昧さに驚くのである。アマチュアの相撲愛好家として構想をあたためてきた著者が、一九九二年から始まった「世界相撲選手権大会」に関わったことが、本書の成立に大きな刺戟となったことは想像にかたくない。日本の伝統とされている個々の項目を、政治・経済・権力・習俗……といったさまざまな効果の集積として、分析・再構成することは、日本の「国際化」のための不可欠の前提である。

（社会学）

『ゴーマニズム宣言・第4巻』小林よしのり著（94年6月30日発行）

よしりんに直撃！

“秘書²ばなし”

フェスティバル』はムリなのかしら？

カナモリ　この〝ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル〟って提案には肝を抜かれたよ。〝部落差別問題〟って言うと、重苦しくて、堅苦しくて、陰鬱な印象がどうしてもするじゃない？　そこに、こんなにハレと言うか、華がある策を提唱するんだもの、もの凄い驚きがあったな。

末永　先生ぴゃんはモヤモヤ、じめじめ、だらだらが嫌なのよ。

よしりん　わしも、この〝ザ・部落ウルトラ解放フェスティバル〟っていうのは漫画的な発想の産物か？　ってところで結構悩んだりもしたけど、実際、提案してみたら、橋爪大三郎氏が毎日新聞で「全く正しい」と書いてくれたり、産経新聞の『斜断機』でもとりあげられもした。そして解放同盟・池田支部書記長のみなみあめん坊氏が、今年3月の全国大会で「ザ・部落ウルトラ解放フェスティバルについて解放同盟も真剣に考えるべきだ」と発言したら、会場から拍手が起こった、という事実を聞いてわしは確信したよ。これは冗談なんかじゃない、マジな提案なんだ。

カナモリ　価値逆転の発想だよね。これが実現されたら、現状の状況が一気に逆転する契機になるよ。

末永　でも『斜断機』で書いてあったことは、なんだか否定的じゃなかった？

よしりん　うしまつ思想だな。部落差別に関しては「寝た子を起こすな」「わざわざ事を荒立てて、部落差別の知識を植え込むのはどうか」という考え方もあるんだ。黙ってれば目に見えないし、根本的にも何も違わないんだから、一般社会に溶け込んでしまうのも可能だろうって考え方だな。けど、それにしたって居住地域の問題があるだろうし、膨大な時間がかかるのは目に見えているよ。もし、わしの出自が被差別部落だったら、わしが生きてるうちに、なんとか状況を変えたいと思うがな。

末永　ふーん、なるほど、そーゆーことか。

よしりん　これを描いた後、その時は自分も参加させてくれ！　というミュージシャンもいたな。手紙をくれたのは、在日韓国人のプロの歌手だったけど。

カナモリ　へぇ、やっぱり賛同する意思のある人がいたのね。

よしりん　わしはこの案が、部落差別がこの先こうして続いていく状況を打破する画期的な策だと、いまでも信じとるし、解放のみなみ氏とは、これを実現する方向で、現在、作戦を練っとる最中だ。

末永　先生ぴゃんって、とんでもないこと考えつくよね。

カナモリ　またそれを実行に移そうとするところが、とんでもないよ。

よしりん　わしのこと〝とんでもナイト〟って呼んで。

1994-3 - 22/22

『リテレール』11号　94年冬号　pp. 28-29　メタローグ　(94年12月1日発行)

●日本人 どこがダメか

政治が絶望的に下手くそな日本人

橋爪大三郎

「日本人・どこがだめか」とは、いかにも日本らしい特集かもしれない。これが中国なら、「中国人・どこが優秀か」という特集でないと、売れないだろう。この自信過剰が、中国人のだめなところだという説さえある。というわけで、日本人がどうだめなのかを、中国人と比較して論じてみることにする。

まず端的に、中国人は人材が多く、しかも一人ひとりが堂々としている。いっぽう日本人は、一人になると貧相だ。一対一では、完全に日本人の負けである。ところが集団になると、日本人は俄然力量を発揮する。俺がリーダーだ、いや俺のほうが偉いと、中国人が内輪でもめているあいだに、日本人はさっさと隊伍を整え、効率的な組織をこしらえてしまう。

近代中国が四分五裂して、列強の餌食になっているあいだに、日本は明治維新を成功させ、新興工業国になり上がった。こうした歴史の分かれ目も、いまのべた事情と関係があるのかもしれない。

＊

中国は、世界の中心、文明そのものであった。その正統教義である儒教のテーマをひとくちで言うなら、人民を統治するリーダーを養成すること、これに尽きる。実際に出来あがるのは、皇帝を頂点とする官僚組織で、そこには上司も部下もあるのだが、部下は上司の仕事の一定部分をそっくり請け負うかたちになっているため、やっぱりリーダー然としている。〝誰かの部下になるための訓練〟など、中国人はあまり好まないのだ。

これに対して日本は、中心でなく周縁、文明の外れにある。外れである以上、どこかよそから文明の成果をかっさらってくるのは当たり前だ。だから第一級の知識人は、日本でなくよそにいるものと、みんな思っている。また目標さえはっきりしていれば、それに追いつくのは得意だ。そこで日本の教育は、リーダーになる訓練よりも、よい部下であるための訓練を重視することになる。たいていの日本のリーダーは、リーダーになる訓練など受けていないから、長年勤めたあと辞める間際にトップの座につかされ、目を白黒する。でも心配することはない。日本の組織ではたいていのことは、いつのまにか部下が決めてしまうからだ。こうした組織を外からみると、肝心の決定は誰が下したのかわからないし、リーダーもその責任は取らない。まことに奇妙だ、ということになる。

こういうわけで、人間のスケールでは、日本人は中国人にかなわない。もちろん中国でも、ダメな人（小人）はとことんダメなのだが、リーダーとなると風格がまるで違う。なぜなら中国のリーダーは、すべての要素をそなえた小宇宙でなければならないからだ。

＊

これを別な角度から見てみよう。中国人は政治に天才的な冴えをみせる。いっぽう日本人は、政治が絶望的に下手くそだ。この違いはどこから来るのか？

中国はもともと多民族国家であり、周辺の異民族にも何回か征服された。そんな厳しい状勢に対応して、人間関係の結束が固い。血のつながった者は「宗族」という集団をつくり、血のつながらない者は「幇」という結社をつくる。こうしておけば、土地を追われ財産を奪われ散り散りばらばらになっても、仲間をみつけて再起をはかることができる。中国では目にみえる組織や法律の信頼性より、人間関係がものをいうのだ。

日本は平和な社会なので、そこまでものを深刻に考える必要がなかった。日本人にとっては、たまたま自分が所属した集団で、うまくやっていくことが大切だ。固定した人間関係よりも、集団への帰属のほうが重い。だから企業は、容易に「共同体」に転化してしまう。それどころか、天皇をいただいた国家までもが、共同体に転化してしまった。戦前の日本人が戦争を支持したのは、共同体の危機を感じたからである。

さて中国の組織では、ものごとをリーダーが決めることがはっきりしている。いっぽう組織の内外には、さまざまな人間関係が張りめぐらされている。そこでリーダーの序列をめぐって、またその後継者をめぐって、不断のかけひきと争いがまきおこる。このため極端に言えば、組織の日常業務もすべて政治になってしまう。

いっぽう日本の組織では、合意が重視される。合意といっても、人びとが討論の結果コンセンサスに至るのではなく、反対の意向がないことを順番に確認するだけである。合意をうるのに、リーダーシップは必要だが、リーダーは要らない。また、合意のかげに隠れて、すべての対立（政治の前提である意見の相違）は闇にもぐってしまう。

日本の組織のなかにも政治らしいものはあるのだが、その技術は、公の政治では使いものにならない。民主主義とも関係ない。それを制度化して、正式の制度にすることもできない。合意を重視するとは、言い換えると、政治はないほうがいいと思っているということ。だから、日本人が政治下手なのは当たり前なのである。